東方地底郷

暇人マッスー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方地底郷

【Ｎコード】
Ｎ６７８１Ｕ

【作者名】
暇人マッスー

【あらすじ】
「あれ、おかしいな、ここどこ？」
という感じで幻想入りしてしまった主人公
しかもその場所は地霊殿だった！！！

迷い込んだ暇人（前書き）

この物語はあくまで作者の脳内設定です
自分は初めて小説というものを書きましたので、多少の不備があるかもしれませんが
そこのところはご了承ください

迷い込んだ暇人

気が付くと、そこは宮殿のような場所だった。

「あれ、おかしいな。確か俺は自転車で適当に出かけていてはずなんだけど・・・
どうしてこんなところにいるんだ？」
まったくわからなかった、どうしてこんなとこにいるのか、なんでベットで寝ているのかも。

「とりあえず、ベットから出ようかな」

と言いつつベットから出ようとすると、急にドアが開き、そこには奇妙な服装をした少女が立っていた。

魅月＆ａｍｐ；？？？「「あ・・・・・・・」」

偶然声が重なった、そして暫くお互いに見つめ合ってた
そのおかげで彼女を観察することが出来た。
胸には赤い目のような楕円形の付いており、背中にはカラスのような黒い巨大な羽が生えていた
そして、右腕には六角形のような少し長い筒が付いていた

流石に気まずいので声をかけようとしたら

？？？「さ・・さ・・・・」

魅月「さ？・・・なに？」

？？？「さとりさまーーーーーーーーーーー！！！」

とか言いつつ大声で飛び出していった。

魅月「・・・・・・なんだったんだ？一体？」

暫くすると今度は違う少女が入ってきた、よく見るとその後ろにさっきの少女が隠れていたが羽が大きいために
余り隠れきれてないようである。

？？？「目が覚めましたか、体の具合はどうですか？」

魅月「え？あ、う、うん大丈夫だけど」

？？？「そうですか、それはよかったです」

そう言って最初に入ってきた少女が微笑んだ。
何だろう、物凄く可愛い
心の中でそう思っていると、最初に入ってきた少女が顔を赤くしながら

???「か、かわいい!?生まれて初めて言われました・・・・／／／」

魅月「なぜにバレたし!?」

見抜かれた?この娘は読心術でもやっているのか?

???「読心術ではなく、私の能力ですよ」

また見抜かれた、・・・ん?今この娘『能力』と言わなかったか?

???「あの、考え中のところよろしいですか?」

魅月「あ、はい、すみませんでした」

さとり「そうですね、まずは自己紹介からですね、私は古明地さとりといいます、
そして後ろにいるのが霊烏路(れいうじ)　空(うつほ)です、ほらお空、隠れてないで挨拶して」

お空「霊烏路　空です、さっきはいきなりごめんね」

魅月「いや大丈夫だよ、俺は琴原　魅月、よろしく」

さとり「琴原　魅月さんですね、わかりました」

これが彼女たちとの出会いであった、そして、これから起きることを僕は知る由もなかった

詳しい説明はご飯の前ぐらいに・・・（前書き）

戦闘シーンはまだ出てきません
個人的には派手なのを書いてみたいですｗｗ

詳しい説明はご飯の前ぐらいに・・・

お互いの自己紹介も終えたので、幾つか質問をしてみようとおもった

魅月「あの古明地さ「さとりでいいですよ」じゃあさとり、どうして僕はここにいるの？ていうかここ何処？」

さとり「？なにも覚えてないのですか？？」

魅月「ごめん、なにも覚えていないんだ」

さとり「そうですか、ではなにがあったのか説明しま「ぐうぅぅぅぅぅ」・・・・・・・・・・」

魅月「その、ごめんなさい」

さとり「・・・・・ご飯でも食べながらお話ししましょうか、では琴原さ「魅月でいいよ」・・・では魅月、食堂に行きますのでついてきてください、行くわよお空」

お空「あ、まってさとりさま！」

というわけで食堂に到着した、しかしこの宮殿？随分とひろいな・・・・

さとり「そうでうね、確かに広いですね」

もう驚かないぞ、流石に慣れてきたからね

魅月「んでさとり、どうして僕はここにいるの？」

さとり「う～ん、そうですね、まず魅月にはこの世界のことについて説明しましょうか、ここは幻想郷、忘れられた者が来るところです、ちなみにこの建物は地霊殿といって幻想郷の地底に位置します」

魅月「忘れられた者が来る場所か・・・・なんか悲しいな」

さとり「そして、なぜあなたがここにいるのかというと・・・・・・」

それは2時間ぐらい前だったらしい
さとりが自分の部屋でお茶を飲みながらくつろいでいると、いきなり空間が避けて魅月が落ちてきたらしい

さとり「そしてあなたは気絶していたのでお空にベットまで運ばせて、それからあなたが目覚めて今の状況に至ります」

お空「感謝してよね、あなた結構重かったんだから」

そう言って空は胸をはってドヤ顔してきた

魅月「そうだったのか、ありがとう空さん」

お空「えへへへ、あと私のことはお空って呼んでね」

さとり「さて、そろそろ料理が出来たみたいなのでいただきましょうか」

すると奥の方から妖精のような羽の生えた小さい女の子たちが台車に料理をのせてはこんできた
僕が驚いているとさとりが「本物の妖精ですよ」と言ってきたので驚いていると、
横に猫がいた、見た目は普通の黒猫なんだが、尻尾が二本ある
明らかにおかしいと思っていると突然光出し、人になった
服装は黒い服を着て髪型はツインテールでネコミミだった、しかも丁寧にしっぽまで生えていた
驚きのあまり声が出せずにいると、ネコミミツインテールの娘が話しかけてきた

???「あなた、だれ?」

魅月「へ?あの、その・・・」

さとり「お燐、その人は御客人で琴原　魅月さんよ」

お燐「へ～そうなんだ、あたしは火焔描（かえんびょう）　燐（りん）、妖怪だよ」

魅月「へ・・・・・妖怪?」

さとり「ああ、いい忘れてたけど地霊殿には妖怪と妖精と怨霊しかいないわ」

魅月「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

さとり「魅月？？？」

心配そうにさとりがどうしたのという？感じで顔を覗かせてきた

魅月「・・・・・・・・妖怪って実在したんだ」

さとり「そんなにおどろくことですか？」

魅月「いや、だってさ、僕の世界では妖怪なんてものは存在してなかったしなぁ」

と驚いているとさとり、お空、お燐が驚いた顔をしていた

さとり「ねえ魅月、あなた怖くないの？」

さとりが訪ねてきた

魅月「え？なにが？」

さとり「だって、普通の人間なら驚いて腰を抜かすぐらいよ、あなたみたいなのは初めてだわ」

魅月「そうなんだ、僕はそんなにはこわくないけどね、それに」

さとり「それに？」

魅月「こんなにかわいい人達がなにかするとは思えないしね」

さとり＆ａｍｐ；お空＆ａｍｐ；お燐「「「！！！！！」」」

ん？なにかまずいことといったかな？三人とも固まっちゃたし

さとり「フフフ・・・・・・・・・」

魅月「どうしたの？さとり？」

さとり「人間にそんなこと言われたの初めてだから嬉しくてね、つい・・・」

そう言うとさとりはすこし嬉しそうに笑ってた

それに対してお空とお燐はなんだか嬉しそうな顔をしていた

さとり「さて、せっかくの料理が冷めてしまう前にいただきましょうか」

魅月「あ、そうだね」

お空「ごはん、ごはん♪」

お空は嬉しそうにお箸を持っている

お燐「お空、行儀が悪いよ」

それを注意するお燐

さとり「それじゃ、いただきましょう」

魅月＆ａｍｐ；さとり＆ａｍｐ；お空＆ａｍｐ；お燐「「「「いただきます」」」」

全員ピッタリとあった

そのことがおもしろくてみんなすこし笑っていた

昼食を取り終えた後、再びさっきの部屋に戻った
さとりが言うにはこの部屋は好きに使ってもいいらしい
そうして部屋にいるわけだが、なにもすることがないので困っていた
携帯電話を確認したが勿論圏外なわけでして、しかも充電し忘れて
いたので残量が少ない
しかも食事を取った後なので睡魔がおそってきた

魅月「考えるのは後にして眠いから寝よう」

そう言って寝ようちまぶたを閉じた時、不意に上に何かが乗ってい
る感じがしたので目を開けてみると
そこには銀髪の少女がまたがっていた。

魅月「えと、きみだれ？」

こいし「私？私は古明地こいしっていうんだよ、それよりおにいち
ゃんだれ？」

魅月「僕は琴原　魅月、ただの迷い人で暇人だよ」

こいし「ふ～ん、そうなんだ」

なんだろうこの娘、うまく言い表せないがいきなり目の前に現れた
どうやって入ってきたんだろう、普通入ってきたら気づくしな
そうやって色々考えていると、急にドアが開いてそこにはさとりがいた

さとり「魅月、いい忘れていたのですが私には妹がいまし・・・て・・・」

なにかを言っていたさとりが急に固まった
何故だと思い、自分の状態を確認してみた
1、部屋の中には僕とこいしちゃんだけだった
2、こいしちゃんはちょうど僕の腰のあたりに乗っている
3、こいしちゃんはそのままである
このことから言えることは・・・・・・・・・・・・・

魅月「あれ、なんかちょっとまずいんじゃね？」

とか言ってさとりを確認すると、下を向いてプルプル震えていた

魅月「あの、さとり？」

さとり「・・・・この・・・・・」

魅月「この？」

さとり「この変態がーーーー！！！！！」

そう言い顔を真っ赤にしながら飛びかかってきた

魅月「ちょ、さとり！！誤解だって！！！」

さとり「黙りなさい！！！！人の妹に手を出しておいて！！！！」

さとりはレーザーのようなものを放ってきた
それを間一髪で避けることに成功した

魅月「なにするんだよ！！あぶないだろ！！！」

抗議するものの聞こえていないらしくさとりは次のレーザーを放っていた
これは流石に避けきれるはずもなくもう駄目だと思った
諦めて目をつぶった・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？
痛くない、そう思いレーザーを確認すると

魅月「・・・・・・・・・おそ！」

さとり「え？なんで？？？」

これにはさとりも驚いた顔をしていた
それもそのはずである、普通にレーザーを放ったはずなのに
そのレーザーがものすごくおそかったからである。これを見たさとりも流石に落ちついたようである

詳しい説明はご飯の前ぐらいに・・・（後書き）

次回は魅月の能力についてなんですが、まだ最初の方なので能力については
少ししか触れませんので、お楽しみに（笑

ちょっと能力にふれるだけ

魅月「あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！！、さとりが僕にレーザーを放ったまではよかったがなんとそのレーザーのスピードが見る見るうちに遅くなっていったのぜ。
なんだかわからないが奇跡とかそんなチャチなもんじゃねえ！！もっとなにか違うものの片鱗を味わったぜ」

さとり「だれにむかって話しているのですか？」

魅月「あ、ごめんごめん。つい興奮しちゃって」

今さとりの部屋に来ています
部屋の中はとくにこれといったものはなく、普通の部屋だった

さとり「とりあえず、先ほどの事は謝ります」

魅月「あ、いいよ気にしなくても。誰にも間違いはあるから」

こいし「まったく、おねえちゃんはすぐ勘違いしちゃうんだから」

魅月「いや、あそこで僕の上に乗っていたこいしちゃんにも問題はあると思うよ」

さとり「と、とりあえず話を戻しますよ、先ほどのことについてですが・・・・・」

そう、さっき確かにレーザーが遅くなった、何の前触れもなくいきなりである
最初僕はさとりが手加減してくれたのかと思ったがどうやら違うらしい
じゃあこいしちゃんが？と思って聞いたが違うと即答された

さとり「私の考え方が正しければ、あれは魅月の能力だと思います」

魅月「能力？そもそも能力って何？」

さとり「簡単に説明しますとそのものが持っている力ですね、私でいうなら『心を読む程度の能力』ですね」

こいし「ちなみにわたしは『無意識を操る程度の能力』っていうんだよ～」

魅月「なんかふたりともすごそうな能力もってるな」

聞いた話だとお空が『核融合を操る程度の能力』、お燐が『死体を持ち去る程度の能力』とかいうらしい
なんか聞くだけでも結構危なそうな能力だな

魅月「色々な能力があるんだな、ちなみに俺の能力って何？」

さとり「さすがにそれはわかりませんね、わたしの能力はあくまで『心を読む』程度なので」

魅月「そうか、なんか気になるな」

自分の能力なのに自分でもわからないとはおかしな話である

???「あなたの能力は『加速と減速を操る程度の能力』よ」

魅月&さとり&こいし「「「!!!」」」

全員で声のする方向に向くとなんと空間が割れてその中から金髪の美女が現れた

紫「こんにちは琴原　魅月、私は八雲　紫というわ」

魅月「あ、どうもこんにちは、じゃなくて!どうして俺の名前を!?あとなんで能力も知ってるの!?」

紫「まあ少し落ち着きなさいな、そこの小娘たちも落ち着きなさい」

さとりとこいしちゃんを見ると臨戦態勢をとっていた

そしてなぜか後ろにはお空とお燐がいた、いつからいたんだろう・・・・

紫「そんなに殺気をださないの、それと今攻撃すると間違いなく彼

も巻き込むわよ」

さとり&こいし&お空&お燐「「「「・・・・ッ!!!」」」」

紫「今日来たのは彼の能力を教えるためよ、だから安心しなさい」

紫さんがそういうと全員構えを解いた

魅月「あの、僕の『加速と減速を操る程度の能力』っていったいどんなのうりょくなんですか？」

紫「そこまでは流石に知らないわよ、いろいろ試してみなさい、じゃあ用はこれだけだから」

そういって紫さんの横に隙間ができてそこに入って行った

魅月「なんだったんだ・・・・・？？」

さとり「魅月！大丈夫でしたか！？なにかされませんでしたか！？」

みんな心配そうによってきた

魅月「うん、大丈夫だよ、それよりもみんな身構えてたけどなんで

？」

お燐「あいつは八雲　紫といって別名［スキマ妖怪］なんて言われていて、この幻想郷の管理者だよ」

お燐が説明してくれた、話によると妖怪の中では最強クラスらしい
それにいろいろと悪い噂があるために普通はみんな近づかないらしい

こいし「もう！なんなのよあいつ！いきなり現れて！」

お空「うにゅ～今度来たら核融合でフュージョンしつくしてやる！！」

魅月「ゴメンお空、何言ってるか全然わからないから」

お燐「まあ何事もなくてよかったね、魅月も無事だしね」

さとり「そうね、ほんとによかったわ」

みんな僕のことを本気で心配していたらしい
それがわかると嬉しくなってきた

魅月「みんな心配させてごめんね」

さとり「まったくですよ・・・・・そうだ！今日は魅月が幻想郷に来た記念に宴会でもやりましょうか」

こいし「おねえちゃんそれいいね！じゃあお空、お燐、宴会の準備して」

魅月「ちょ、ちょっと！大袈裟だって！」

僕の話も聞かずにみんなは勝手に話を進めていた

さとり「それじゃあお空は妖精たちと一緒に宴会の準備を、お燐は旧都から星熊さんたちを連れてきてちょうだい」

お空「わかりました！妖精を連れて星熊さんたちを連行するんですね！」

お燐「ちょ、それ私の仕事だから！第一妖精たちじゃ歯が立たないから！」

こうしてみんな僕の話を聞かずにどんどん宴会の準備をしていった

ちょっと能力にふれるだけ（後書き）

ちなみに僕はフランが大好きです

なぜか宴会スタート（前書き）

最近暇が無くて結構困っている作者です

なぜか宴会スタート

魅月「どうしてこうなった・・・・」

今目の前で起きていることは現実なんだろうかと疑いたいぐらいだった
ちなみに魅月は今地霊殿の最上階にいた。（宴会をするために移動した）
とあるところでは妖精と獣？が一緒に酒を飲んでいるよく見るとお空とお燐もいた
なぜか獣の姿で
そしてとあるところではさとりとこいしを中心に酒をのんでいる
その中には体操服を着たおねえさんや緑色の目をして尖った耳の女の子、
更には髪を大きなリボンで後ろに束ねていて茶色い服を着た女の子も手にはなぜか桶があり、
その中には小さい緑髪の幼女が入っている
そのた色々な考え事をしているとその一団が僕に

？？？「ちょっとそこのあんた！」

魅月「はい？なんでしょうか？」

？？？「あんただろ、最近地霊殿に迷い込んだ人間ってのは？」

魅月「多分合ってると思います」

???「多分？まあいいや、そう言えば自己紹介が遅れたね、私は星熊（ほしぐま）　勇儀（ゆうぎ）、
鬼の四天王の一人だよ、よろしく」

魅月「あ、僕は琴原　魅月といいます、よろしくお願いします」

お互いに自己紹介して、僕は勇儀さんを見た。
額には特徴的な赤い一本の角に星が入っており、服装は上は体操服で下が長めのスカートだった
そしてお空と同じぐらいの大きさの豊満な胸がそこにはあった

勇儀「どこを見てるんだい？・・・・あぁ、なんだ。そんなに見たいならいつでも拝ませてやるぞ？」

そう言って勇儀さんが胸元を見せてくる

魅月「べ、別に見てないですよ！！！、それに結構です！！！」

僕はあわてて反論した、流石にそんなものを見せられたら気が吹っ飛びそうである

???「ゆ、勇儀！！からかいすぎよ！それに相手は男でしょうが！！」

そう言って勇儀の横にいた女の子が勇儀を止めに入る

パルスィ「悪いかったわね、それと私は水橋　パルスィ、気軽にパルスィと呼んでくれて構わないわ」

魅月「わかった、よろしくねパルスィ」

ヤマメ「じゃあ今度は私ね、私は黒谷　ヤマメだよ、よろしくね、それとこっちが・・・」

そう言ってヤマメは視線を落とす、それにつられて目線を下に落とすとそこには桶に入った幼女がいた

キスメ「釣瓶落としのキスメです、よろしくお願いします」

魅月「ヤマメにキスメだね？よろしくね」

そういってパルスィ、ヤマメ、キスメの三人を見た
パルスィは勇儀さんより背は低くて、外見をみると僕とそんなに変わらない年齢を感じたが実際は僕より年上であると思う
ヤマメはパルスィと背丈は一緒ぐらいで、話によるとどうやら土蜘蛛の妖怪らしい
キスメは見たまんまで、桶に入っているので結構小さく感じた、実際に見た目は小学校一年生位である
こうして話していると向こうからさとりが近づいてくるのが見えた

さとり「魅月、楽しんでいますか？」

魅月「あぁ、それなりに楽しんでいるよ」

さとり「そうですか、それはとてもよかった」

不意に見せてきたさとりの笑顔にドキっとしてしまった
それは反則だろうと思っているとさとりが顔を真っ赤にしていた
どうやら心を読まれたらしい

魅月「あと、そのえ～と、さとり？」

さとり「は、はい！？なんですか！？」

魅月「あんまり覗かないでね、僕も結構恥ずかしいから・・・」

さとり「は、はい。わかりました」

なんかものすごく空気が重い、何とかならないかと思っていると

お空「み～づ～き～！！！」

魅月「うお！？ちょ、ちょっとお空、いきなりなんだ・・・って酒臭い！？」

いきなりお空が後ろから飛びついてきたのだ

お空「魅月～～～お前もいっしょにのめえええええ！！！！」

魅月「いや、僕は酒飲めないからね！！」

さとり「お空！あなたちょっと飲みすぎよ！」

お空「うにゅ～～そんなことないれすよ～～～」

そういってお空はさらに強く抱きついてきた
勿論そうすることによって魅月の背中に凄く大きく柔らかいものが当たる

魅月「ちょ、お空！！頼むから抱きつくのやめて！！さとりも見てないで助けて！！！・・・・さとり？」

さとり「ふ～～～んそうなんですか、やっぱり魅月も大きい方がいいと・・・」

魅月「へ？一体何を言っているんだ？？・・・まさか！！！」

魅月は気づいた、お空に抱きつかれた時に心を読まれていたことに

魅月「ち、違うんださとり！！これにはどうしても・・・」

さとり「そんなに、そんなに大きい方が好きかーーーー！！！」

魅月「まってさとr、アッーーーーー！！！！」

さとりは魅月をボロボロになるまでレーザーを放っていた
それを見ていた地霊殿関係者たちは爆笑していた

魅月「まったく、すこしは手加減をしてほしいよ、一応これでもボク人間なんだし」

お燐「大丈夫だったかい？はい、これお冷」

魅月「ありがとう、お燐」

お燐が心配して来てくれたみたいだ

お燐「いやしかし、あんな楽しそうなさとり様久々に見たよ」

魅月「そうなの？僕が見るからにはいつも楽しそうだけど」

お燐「確かにそうだけど、いつもとはちがうのさ」

魅月「・・・・・ねえお燐、昔さとりになにかあったの？」

お燐「どうしてそんなこと聞くんだい？」

魅月「いや、なんとなくね・・・」

僕は気になった、ただそれだけだった

お燐「・・・・・さとり様の能力は知ってるよね？」

魅月「あぁ、確か『心を読む程度の能力』だったよね」

お燐「そうだよ、その能力はとても便利だよ、相手の心が読めるからね。
でもね、心を読まれるという事は弱点を見られているのと同じなんだ、だから昔からさとり様はみんなから嫌われてたんだ」

魅月「そうだったのか・・・・・・・」

お燐「うん、でもね。魅月が地霊殿に来てからさとり様はだんだん笑うようになったんだ」

正直驚いた、さとりにそんな事があったなんてしらなかったから
でも、なんだかさとりの気持ちがわかったような気がした
流石に少し気まずくなったので地霊殿の中を見て回ることにした

魅月「改めてみると、すごいなここは」

一人で感心していると、ふとある部屋が目に止まった
そこに入ってみると、中には部屋の中心に大きいピアノが置いてあるだけだった
気になったのでピアノに近づいてみた、大きさは普通のピアノの少し大きい位で、傷一つなかった
鍵盤はどうなんだろうと思い、ピアノに触れると頭の中に何かが流れてきた

魅月「これは・・・音？」

理由はわからないが頭の中に音が流れ込んできたのである

魅月「・・・・・久々に引いてみるか」

そう言って、魅月は鍵盤に指をかけた、すると勝手に指が動きだし、美しいメロディがピアノから流れ始めた
とても優しく、安らぎのあるメロディだった
自分でもわからないぐらいに弾けた
ただ弾いている自分のとても安らいだ、暫くピアノを弾いていると、

さとり「とてもいい音色ですね」

魅月「さとり、いたのか」

こいし「わたしもいるよ～～」

いつ入ってきたんだろうと考えていると

さとり「あなたが弾き始めてぐらいからですよ」

魅月「へ～、ってあんまり読まないでね、はずかしいから」

こいし「それよりも早く続けてよ～～」

魅月「あぁ、いいよ」

そういって僕は再びピアノを弾き始めた

なぜか宴会スタート（後書き）

魅月「作者、暇はつくるものですよ」
作者「作れないからこまってるんじゃないか・・・・・・・」

じみにドロドロ？

次の日、僕は地霊殿を回って見ていた
理由は単純にやることがないからである
試しに能力の練習をしてみたが、非常に残念な結果に終わった
まず一つ目は能力の制限である、僕の『加速と減速を操る程度の能力』は加速は生物にしか効果がなく、
減速は無生物にしか使えないのである、これを知った時は流石に落ち込んだ
さとりが言うのには「覚醒したばかりですし、スキマ妖怪が言ったことですからあまり気にしない方がいいですよ」、
という感じに言ってはくれたものの、内心キツイわけで・・・・・・
まあそんな感じで練習は終わったので地霊殿をブラブラしていた
前に宴会で知り合ったヤマメの話によると地霊殿以外にも旧都というものがあるらしく、そこには妖怪しか住んでいないという
行ってはみたいものの、流石に人間が一人で歩くには危ないとのことなので、今度お燐とかその辺にでも
一緒についてきてもらおうと思う。
何故お燐なのかというと、さとりはあまり出たくはないらしい、お空は？、こいしちゃんは目を離すといなくなってしまうのでアウト、
というわけでお燐に今度連れて行ってもらおう
それはおいといて、今はこの現状を打開する事を考えようと、そう考えていると、

魅月「お？この部屋は・・・・・」

とある部屋が目にとまった。

この部屋は昨夜ピアノを弾いた部屋だった
少し気になったので入ってみると、昨夜とは変わらぬ感じでピアノが置いてあった

魅月「そういえば昨日弾いたけど、良く弾けたな僕、小さい頃はよく弾いていたけど」

魅月の家は結構な金持だった
その為か小さいころから色々とやらされてきた
だがそんな毎日に嫌気がさして伯父のところに行ったのであった
昔を思い出していると

こいし「なにしてるの？またピアノ弾いてくれるの？」

魅月「うお！？なんだ、こいしちゃんか」

いきなり横から声がしたので振り向くとそこにはこいしがいた

こいし「なんだとはひどいなぁ、もう」

頬をふくらませてこっちを見ている
マズイ、物凄く可愛い、そうおもっていると

こいし「今なんか変な事考えてたでしょ」

魅月「いや！？そんなことはないよ！」

こいし「ふ～ん、まあいいや。それよりおにいちゃん、暇なら弾幕ごっこやろうよ♪」

魅月「弾幕ごっこて何？」

弾幕ごっこ？なんだそれは？この世界での遊びだろうか？

こいし「あ、そっか。おにいちゃんは弾幕ごっこ知らなかったね、よかったら教えようか？」

魅月「ん、ああ、お願いしようかな」

『弾幕ごっこ』、こいしちゃんが言うには先にルールを決めて、お互いに弾幕と言うものを出し合い、
『スペルカード』というもの必殺技みたいなものを宣言したりするというものであった。なにその危なそうな遊び
さらにはあそびというよりも、困ったら弾幕ごっこという感じで物事を解決しているらしい

こいし「というかんじだよ、大まかだけどわかった？」

魅月「うん、危ないってのはわかった。わかったのはいいけども、

どうやって弾幕出すの？」

こいし「え～っとね、こんな感じ！」

そういって近くにあった柱に手を向けると、突然のこいしの掌が光出し、青白い弾が出た
その球が柱にぶつかると爆裂音の後に、柱にはクレーターが出来ていた

こいし「どう？わかった？」

魅月「ううん、ぜんぜんわからない」

紫「ならば教えてあげるわ」

魅月「ならお願いしようかな、ってえ？」

後ろの方から声が聞こえたので振り返ってみると、そこには前にも現れた金髪の美女が立っていた

紫「ごきげんよう、魅月」

魅月「あなたは確か、八雲　紫さん」

紫「あら、覚えていてくれたの、光栄ですわ」

こいし「それで、魅月に何の用かしら、『オバサン』？」

ピキっとなんだか触れてはいけないようなものに触れた気がした

紫「今、何と言ったのかしらねぇ、小娘？」

こいし「聞こえなかったのかな？『オバサン』？」

再びピキっという音が聞こえた。

流石にまずいと思ったので止めようと思い

魅月「ちょ、ちょっと！こいしちゃん！こんな綺麗な人にいくらなんでも言いすぎじゃ」

紫「・・・・・・・・・・・・魅月、今何て言ったの？

魅月「へ？『いくらなんでもいいすぎじゃ」って」

紫「その前、その前」

魅月「・・・？綺麗な人？」

紫「それよ！」

そういうと紫が嬉しそうな顔をして抱きしめてきた

抱きしめられたことにより、胸のあたりにとてつもなく柔らかいものがあたっている

魅月「ちょっと紫さん!?あたってる、あたってるって!!!」

紫「もう!綺麗なんて言われたの久しぶりよ!みんな悪口しか言わないし、あなた最高よ、大好きだわ!!」

そういい今度は魅月の頭をつかみ、自分の胸に押し付けてきた
流石に男である魅月にはたまったものではなかった

魅月「ちょっと!紫さん!!恥ずかしいから!!!、こいしちゃん助けてってあれ?こいしちゃん?」

こいし「ナニ、ヨンダオニイチャン?」

こいしちゃんに助けを求めると、こいしちゃんは死んだ魚のような目をしながらどす黒いオーラを放っていた

こいし「ダメダヨ、オニイチャン。ワタシトオハナシシテタンダカラ、ホカノヒトトオハナシシテチャ?」

魅月「えっと、あの、こいしちゃん?何を言ってるのかな?」

こいし「ダイジョウブダヨ、オニイチャン。ワタシハフツウダヨ?」

はっきり言おう、今のこいしちゃんは怖い
なんだか目は死んでるし、口調はカタゴトだし、流石にこうなると危なくなってきた

魅月「こいしちゃん？落ち着いて、これは誤解だからね！？」

額から汗が出てきた、しかし紫は気にもせずにまだ魅月を抱きしめている

魅月「紫さん！？そろそろ離して！？このままだとぼくがあぶな・・・・」

紫「私はまだ綺麗、私はまだ少女、私はまだ若い・・・うふふふふふ」

紫は自分の世界に入ってしまっていた
そんなにも綺麗と言われたことがうれしかったのだろうか？
いろいろと打開策を考えていると、こいしがすでに足元に来ていた

こいし「オニイチャンハワタシノモノダヨ？ダカラワタシシカミチャイケナインダヨ？」

魅月「なんか問題発言してるよこいしちゃん！？」

紫「ちゃんとこっちを向いて！」

こいし「ダメダヨ、オニイチャンハワタシノダヨ？」

魅月「えっとあの、その、誰か助けてくれーーー！！！！！！！！」

流石にダメだと思った、紫は物凄い力で魅月の頭を締め付けていて、
こいしはなにか吹き飛んでしまったような状態だった
これは流石に終わったと思ったその時だった

さとり「『想起「テリブルスーヴニール」』！！」

魅月＆ａｍｐ；こいし＆ａｍｐ；紫「「「！？」」」

突然赤い糸のようなものが延びてきて為、紫は魅月を突き飛ばして
スキマへ回避し、こいしはジャンプして避けた
魅月はというと突然突き飛ばされた為に受け身もとれずに柱に後頭
部からぶつかった

さとり「騒がしいと思えば、またあなたですか、八雲　紫」

紫「あら、昨日ぶりかしらねえ？」

さとりが激怒した目で紫を睨んでいる、それに対して紫は上半身だ

けを隙間から乗りだして余裕の表情で華麗に流していた
魅月が後頭部を抑えつつ見ていると

お燐「魅月、大丈夫かい？」

お空「うにゅ～～たんこぶできてるね」

魅月「ああ、ありがとう、お燐、お空」

お空とお燐が心配して来てくれたようだ

さとり「あなたは毎回訪れるたびに何かしていって、なにか恨みでもあるんですか？」

紫「あら、恨みなんてとんでもない、私はただ魅月が心配だったから来てみただけよ？まあ今回はもう帰るから安心していいわよ」

そう言って紫はスキマの中に入って行った
その様子を見と遂げたさとりが心配そうにこっちに近寄ってきた

さとり「魅月、大丈夫ですか？けがはありませんか？」

魅月「ああ、別にけがはないよ、死にかけたけどね」

さとり「そうですか、まあ無事でよかった、ところで・・・・」

さとりはそういってこいしの方を睨みつけた
こいしはその視線にビビっていた

さとり「さて、どうしてこうなったのか説明してもらいましょうか、こいし」

こいし「えっとね、つまり、その・・・・・・・」

魅月「ああ、僕が話すよ」

少年説明中・・・・・・・・・・・・・

さとり「なるほど、なぜそうなったのかはわかりませんが、元を辿るとこいしに責任があるようですね」

こいし「だって、いきなりあの『オバサン』がきたんだもん」

さとり「はあ・・・・・まずはその悪口をやめなさいあなたは」

こいし「ん～がんばってみる」

どうやらおさまったようだ
するとさとりがこちらに向き直り

さとり「魅月、確か弾幕についてしりたいんでしたよね？」

魅月「ああ、そうだけど」

さとり「なら、明日私が教えてあげます」

こいし「それならわたｓ「だまってなさいこいし」・・・・・はぁい」

魅月「いいのさとり？」

さとり「別に私は構いませんよ、それと明日からは私の近くに居なさい、また今日みたいなことになったら大変ですからね」

魅月「ああ、わかったよ」

こうして次の日からさとりが弾幕を教えてくれることになった

じみにドロドロ？（後書き）

暇が無い、どうしよう。
最近悩んでいる作者です

弾幕練習と過去（前書き）

今回はシリアスがちょっと入っていて最後にサービスシーンがありますのでお楽しみに！！

弾幕練習と過去

次の日、僕は地霊殿の外にある広場に来ていた
勿論弾幕の練習の為である、練習相手はさとりである

さとり「さて、あなたにはまず力の種類を知ってもらいます」

魅月「なんかさとりが先生に見えてきた」

さとり「なにをいっているんですか？まあいいでしょう。まず幻想郷には四つの力が存在します
一つ目は霊力、これはおもに人間などが持っている力です、二つ目に妖力、これはおもに妖怪、まあ簡単に言えば私やこいし、更にはお空やお燐など、妖怪が生まれながらに持っている力です。三つ目に神力、これは名前の通り、神が持っている力です、そして最後に気力、これはあまり持っている人は少ないですね」

魅月「ふ～ん、結構少ないんだね、じゃあ僕が持っているのは霊力でいいんだよね？」

さとり「そうですね、魅月は人間ですから霊力になります、幸いにもあなたは他の人間と比べて少し
霊力が多いようですね。」

魅月「多いってどれ位？」

さとり「そうですね、例えるのならば、普通の人間が１だとして、魅月は６００ぐらいですかね」

魅月「むしろ多くない？じゃあホントに多い人だとどれぐらいなの？」

さとり「ほんとに多い人だと１００００００以上です」

魅月「それってもう人の域超えてるよね！？」

さとり「まあそれはあくまで例外なので」

霊力１００００００万以上とか、勝てる気がしない
まあその人と会う事はないだろうとさとりは付け足してくれたので、
少しは安心した

さとり「それでは力の説明は終わりましたので、弾幕の出し方を今度は教えたいと思います」

魅月「あ、ああうん、わかった」

さとり「？どうしました？」

魅月「いや、なんでもないよ」

さとり「そうですか、では説明に入りますね、基本的な弾幕の出し方はまず手をかざして、集中します、
次に頭の中でイメージします、まあ言うよりもやってみた方が早いですね、というわけで、あそこの木に
向かってやってみてください」

魅月「ん、わかった。えーっとまずは手をかざして、次に集中っと」

さとり「集中したら、掌に力を集めるイメージをしてください」

魅月「・・・・・・・・・・・うお！？」

ポン！っと勢いよくいい音がしてので目を開けてみると、右手から掌に青白い光の弾が出来ていた
それを木に向かって思いっきり放つイメージをすると、木に向かって弾幕が放たれた

魅月「おお！？なにかわからないけどなんとかできた！！」

さとり「そうですね、しかし・・・・・・」

さとりは顔をしかめて弾幕を見た、魅月も弾幕をみると、弾幕はふよふよと遅い速さで木にぶつかった
木の方は少しだけ表面がへこんでいた

さとり「まあ、最初はこんなものでしょうね、徐々に練習していきましょう」

魅月「そうだね、こんなんじゃ簡単に避けられるしね」

そこから弾幕の速さや、量、密度などを練習していったが、量や密度は徐々に上手くなっていったが、
速さだけは最初と変わらなかった

さとり「量や密度は何とかなるのに、どうして速さだけ遅いんでしょう？」

魅月「そう・・だね・・そ、それよりも・・・すこ・・しやす・・・・ませ・・て」

さとり「すいません魅月、大丈夫ですか？」

さとりの話によると、どうやら人間や妖怪、神様とかが弾幕を放つ際に、力を少しづつ消費するらしい
魅月の場合、確かに他の人間と比べると少し霊力が多いようだが、流石に初めて出す弾幕の上に、結構連発して弾幕を出していたので、霊力をそれなりに消費したらしい。
魅月が疲れて仰向けに倒れていると、向こうの方から声が聞こえたので、上半身をあげて声のした方に向いてみると、そこにはこいし、お空、お燐がいた。

こいし「おにいちゃん、大丈夫？だいぶ疲れているみたいだけど？」

お燐「しかし見ていたけど、弱い弾幕だねぇ」

お空「うにゅ～？とりあえず魅月は弾幕が出せるようになったんでしょ？今はそれでいいじゃん？」

魅月「みんなそれぞれのコメントどうも。」

お燐「ああ、そうだ見てて思い出したんだけど、魅月の能力って『加速と減速を操る程度の能力』だよね？」

魅月「ん？ああ、確かそうらしいね、それがどうしたの？」

お燐「ならさ、魅月の能力で弾幕の速さをあげちゃえばよくない？」

魅月＆ａｍｐ；さとり「「・・・・・・あ」」

どうやらさとりも忘れていたようだった、まあ魅月も忘れてはいたが、じつはこの能力、最初は制限がかかっていたが、いつの間にか制限がなくなっていた、多分紫さんが関係しているんだろう

さとり「確かに、魅月の能力で弾幕を『加速』すればはやくなりますね、では魅月、最後に試してみましょう」

魅月「そうだね、よし！ところでどうやって能力って使うの？」

こいし「念じればいいんだよ～」

魅月「難しそうで結構意外と簡単そうだね、まあやってみよう」

」

魅月は気合いをいれて立ち上がり、もう一度木に手をかざし、弾幕

を発射した。
そしてすぐに発射した弾幕に向かって念じた、すると、いきなり弾幕が物凄い速さで木にぶつかった、ぶつかった威力か、木は上半分が折れていた。

魅月「・・・・・・・・・以外と出来るもんだね」

さとり「・・・・・・・・・これは驚きです」

こいし「しかも結構早かったね」

お燐「確かに、思っていたより速かった」

お空「ねえねえ！微妙に見えなかったからもう一回やって！」

魅月「流石に疲れたからもう無理かな」

魅月はその場にペタンと座り込んでしまった。
弾幕＋能力まで使った為に霊力を大幅に使用してしまったためである。
まだ最初の段階で思い出していれば、それなりに疲れなかったかもしれない。

さとり「魅月、大丈夫ですか？」

魅月「え！？あ、うん！ダイジョウブダヨ！」

さとりが不意に話しかけてきたので、少しカタカナが混じってしまった、それと心配そうにこちらを
見てくるさとりが可愛く見えてしまったのである

さとり「まあ大丈夫そうですね、今日はこれぐらいしておきましょう。」

魅月「そ、そうだね。もうこれぐらいにしよう（心読まれてない見たい）」

さとり「それでは魅月、戻りましょうか、こいし、お空、お燐、いくよ」

こいし&お空&お燐「「「はーい」」」

さとり「それと魅月、先にお風呂をどうぞ」

魅月「ん？いいの？」

さとり「汗をかいたままでは風邪をひいてしまいますよ？」

魅月「そうだね、じゃあお先に入らせてもらうよ（たまに見せるさとりの顔も可愛いなぁ）」

さとり「・・・・・・・・なにもでませんよ？」

さとりが顔を真っ赤にしながら言ってきた

魅月「い！？そ、それじゃあ先に行ってるね！」

こいし「あ！まってよお兄ちゃん！一緒にお風呂入ろうよ～」

さとり「な！なんてことをいってるのこいし！おねえちゃんはゆるさないわよ！！」

こいし「え～なんでよ～？」

さとり「そんなもの言わなくてもわかるでしょ！！！」

暫くしてから魅月は風呂場に到着した

魅月「まったく、心を読まないでよね、僕だって結構恥ずかしいんだから」

ブツブツと愚痴を言いながら、魅月は脱衣所で服を脱ぎ、タオルを身につけずに風呂場に入った

魅月「・・・・・・流石にでかいな、そこいらの銭湯よりも三倍ぐらいでかいな」

床は大理石のようなもので出来ており、立ち上る湯気のせいで先が見えない位広かった
立っていても仕方ないので、シャワーを浴びることにした
流石にシャワーはないと思ったが、なぜか古いがシャワーはあった、幻想郷侮れない
と思いながら、魅月はシャワーで汗を流し、シャンプーで髪を洗い、もう一度シャワーを浴びた
シャワーを浴びながら、魅月はこれまでの事を思い出していた
気が付いたら見知らぬ場所で、そこには妖怪が住んでいて、楽しく話したり、食事したり、一緒に弾幕の
練習をしたり、自分のいた場所では天地の差があった
魅月の家は一言でいえば金持だった、それゆえに自由はなく、いつも一人だった
だがいまは違う、周りにはいろいろな人（？）がいる、これだけでも幸せだった

魅月「ここはいいな、ぼくのいた所とは全然ちがう」

そういいながら魅月は左腕を見た
いや、正確には本来『左腕があった場所』を見ていた
魅月の左腕は、肘のすこし出たところから先がなかった。
なぜないのかというと、それは中学生のころであった、いつものように私立の学校から帰ってきた魅月は
少し騒がしい事に気づいた、なんでも指名手配犯が家に侵入したらしい
警備員はなにをしているんだと思ってため息をつきながら、
いつものように自分の部屋に入ろうといた時だった、隣の部屋から物音が聞こえたので、
気になったので隣の部屋をあけると、そこには見たことのない黒ずくめの男がいた
そしてさっきの『指名手配犯』の話を思い出し、恐怖した。
幸いにもまだこちらに気づいていないようだったので、
すぐに誰かを呼ぼう、そうおもい急いでそこから離れようとした時だった

「みたな」

急に背筋が凍るような感じがした、そして、後ろを振り向くと、目の前が赤色に染まった
何が起きたのか分からずに、黒ずくめの男を見ると、なにか刀のようなものを振り下ろしたような状態の男がいた

そして今度は自分をみた、すると、左腕がなくなっていた。
いや、なくなってはいなかった、下を向くとそこには僕の『左腕』が落ちていた
そして、ぼくはそこで腕が切り落とされたのを認識して、

魅月「あああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああ！！！！！！！！！！！！！！」

猛烈な痛みがおそってきた、魅月はそのまま叫びながら転げ回った。
痛みになんとか耐えながらも黒ずくめの男を見ると、刀を上段に挙げていた
僕は死ぬんだ、そう諦めた時に、

「いたぞ！！」

「琴原様のご子息が！！！」

声が聞こえた、その方向を向くと警備員が駆けつけてきた
黒ずくめの男は舌打ちをすると、その場から走ってどこかに行った

「逃げたぞ！！追え、絶対に逃がすな！！！」

「魅月様、お気を確かに！！！」

僕はその後すぐに意識を失った
そして意識が戻り、僕はベットで寝ていた、すぐ横には両親が涙を流しながらこちらを向いていた
「ああ、ここは病院か」そう認識してた、そして左腕を確認すると、勿論そこには『左腕』は存在しなかった
麻酔のせいか、痛みはなかった。
両親の話によると、黒ずくめの男はあの後すぐに駆けつけた機動隊よって逮捕されたそうだ
そしてその後すぐに病院に送られた魅月は手術を受けたが、左腕はくっつかなかったらしい
話を聞いてそうとうショックだった、もう左腕は戻ってこないのである
泣きそうになるのを抑えていると、僕を手術した先生が入ってきて、こう告げた

「もう左腕は戻らないが、義手をつけることができます。どうする、魅月君」

もちろん僕はすぐに義手をつけることに賛成した、このまま腕がないのを見られるよりも
攻めて形だけでもあったほうがいいと思ったからだ
その後義手をとりつける手術をして、体力が回復した魅月は、指名手配犯の裁判に参加した
犯人の供述によると、どうやら強盗目的で魅月の家に侵入したらしかった、当然その後の判決でその犯人は死刑になった
魅月は裁判が終わった後に気付いた、だれも僕のことを心配してなかったから、僕の腕はなくなったんだと
あのとき、だれか僕についてきてくれていれば、こんなことにはな

らなかったんだと、
そして義手が取り付けられた腕を見た、鉄製で、とても重かった。
そして今回のことで、はっきりわかった、

「僕はだれにも心配されてない、だれも僕の事を気にしてない」

その日の夜、とある部屋から少年の泣き声が聞こえた

魅月は、色々な事を思い出していた

魅月「・・・・いかん、何思い出してんだろ、昔のことなんか」

魅月はそっと、一人でつぶやいた

魅月「今は昔のことなんかどうでもいいや、とりあえず風呂に入ろう」

そういって立ち上がり、湯船の方へ歩いて行った
だんだんと湯船に近づくにつれて、人影が見えてきた

魅月「先客かな、まあいいや」

勇儀「おや、そこにいるのは魅月かい？」

魅月「・・・・・・へ？この声は・・・・」

いやな予感がし、恐る恐る湯船に近づくと、そこにいたのは・・・・・・・

勇儀「あんたも風呂かい？奇遇だね」

鬼の四天王こと、星熊勇儀だった、しかも全裸である。

魅月「ゆ、ゆ、ゆ、勇儀さん！？いたんですか！？」

勇儀「ん？ちょっと前からいたよ？それよりあんたも早くはいんなよ」

魅月「な、なにいって・・・・・ブフォ！！」

おもわず魅月は吹き出してしまった、それもそうである
そしてそのまま尻もちをついた

勇儀「おいおい、大丈夫かい？」

ザパァっと音を立てながら勇儀湯船から出て、魅月の前に仁王立ちした

魅月「ちょ、ちょっと！！！せめてタオルを巻いてください！！！」

勇儀「何を言ってるんだい、風呂でタオルを巻くのはマナー違反だよ」

魅月「じゃあせめて後ろを向いてください！！！」

勇儀「さっきから何をいってるんだい・・・！はははぁん、さては興奮してるな、そんなに見たいなら見てもいいんだぞ？」

魅月「な！なにを言ってるんですか！！！興奮なんかしてませんよ！！！」

勇儀「嘘だね、そこも立派になってるじゃないか」

魅月「！！！！！！！！見、見ないでください！！」

勇儀「そんなこと言ってもねぇ、おお！！」

魅月「qあｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ！！」

声にもならない声をあげながら、魅月が悲鳴を出した
それもそのはずである、目の前には勇儀がしゃがんで、魅月の息子を握っているからである
しかも勇儀がしゃがんだせいで、勇儀のたわわに実った二つの山が目の前にあり、更には勇儀の
乙女の部分が丸見えなのである、流石にこれには魅月も顔を真っ赤にしながら

魅月「し、し、し、しつれいしましゅた！！！！！！！」

噛みながら魅月は脱衣所まで走って逃げて行った

勇儀「ああちょっと！！・・・・なんだよせっかく気持ちしてやろうと思ったのに・・・・・・・・・・・・そういえば、左腕が無かったような？」

勇儀は誰もいない広場でひとり呟いていた

弾幕練習と過去（後書き）

最近ほんとに忙しいために、ちゃんと更新できない場合がございますが、
それでも温かい目で見守ってください、こんごともよろしくお願いします

隙間からの贈り物（前書き）

遅れてしまって申し訳ありません。
今回は少しシリアスに・・・・・

隙間からの贈り物

風呂場から自分の部屋に戻った魅月は、顔を赤くしながらブツブツとつぶやいていた

魅月「まったく、勇儀さんは、僕も一応男なのにな／／／」

どこのだれが見ても、誤解を招く現場だっただろう
そう思っていると、さっきの出来事を思い出して、もの凄く恥ずかしくなった

魅月「そ、そういえば、義手だってこと、バレてないかな？大丈夫だといいんだけど・・・・」

紫「あら、あなたやっぱり義手だったの？それなら納得したわ」

魅月「うん、そうなんだｙ・・・・・・・・・・・・え？」

後ろから声がしたので振り返ると、そこには現れるたびに問題を起こす八雲　紫の姿があった

魅月「ゆ、紫さん！？まさか聞いていたんじゃ！？」

紫「まあ聞いてはいたけど、安心しなさい、別に誰にも喋るつもり

はないわ。」

魅月「そ、そうですか・・・・よかった・・・・・」

紫「「ねえ、そんなにバレるのがいやなの？よかったら理由を聞かせてくれないかしら？」

魅月「そんな特には理由はないですけど、ただ周りからいやな目で見られるのが嫌なだけですよ」

説明しながらも、腕がなくなってからの事を思い出していた
学校に行けば周りからは嫌われ、先生までもがなぜか嫌がって魅月は近づこうともしなくなった
家ではそんなことはなかったが、元から嫌われていた為に、あまり心配はされなかった
執事さんやメイドさんはまあまあ、普段とあまり変わらなかったが、両親はというと、息子の腕が無くなったにも関わらず、
次の日からは仕事とか言って出かけてしまった、病院では泣いていたのに・・・・・・、その他いろいろと思い出していると、

紫「ちょっと、大丈夫？」

魅月「・・・・・・・えぇ、大丈夫です」

紫「そう、ならいいわ、もうこの話はおしまいよ、今日は別件で来たの」

魅月「別件？さとりたちにですか？」

紫「いえ、あなたによ、魅月」

魅月「僕に・・・・・ですか？」

なにかしてしまっただろうか？そんなことを考えていると、能力のことを思い出した

魅月「そういえば紫さん、僕の能力について何か知りませんか？なんか制限がなくなってるんですけど」

紫「ちょっと弄ったわ、あのままじゃ使いにくいだろうし、それにこの旧地獄ではキツイだろうしね」

魅月「そうですか、なんかありがとうございます」

紫「別に気にしなくてもいいわよ、それじゃあ話を戻すけど、あなた弾幕はもう打てるのよね？」

魅月「まあ一応は、でもそんなには打てませんよ？」

弾幕を撃てるといったも、まだそんなに数は打てないし、なにによりまだ威力がないのだ

威力的には弱小妖怪をギリギリ倒せるぐらいである

紫「やっぱりね、そんなんだろうと思って、今日はあなたにプレゼ

ントを持ってきたの」

魅月「プレゼントですか・・・・・」

紫「そう、でもその前に質問よ、あなたはなにか武術か何かの心得はあるかしら？」

魅月「武術ですか、まあ剣道のようなものはやってましたけど」

紫「そう、ならこれをあげるわ」

そういって八雲　紫はスキマの中から不思議な形をした剣のようなものを取りだし、それを魅月へと手渡した
刀身はドリルのように渦を巻いており、手持ちの部分は蒼と白？の色で、綺麗な彫刻があった
勿論魅月はこのような剣？は見たことがないので聞いてみることにした

魅月「これが・・・・剣？ですか？」

紫「疑問符をつけなくても、それは立派な剣よ、因みに名前は『カラドボルグ』というわ」

魅月「カラドボルグ？どこかで聞いたような・・・・・・・・あ、思い出した、確かこれって」

『カラドボルグ』
もしくはカラドコルグ（Ｃａｌａｄｃｈｏｌｇ）と呼ばれる神話に登場する刀剣である
。
カラドボルグは、ウェールズの伝説に登場するカレドヴールフ（Ｃａｌｅｄｆｗｌｃｈ，硬い溝の意）と同一視され、エクスカリバーの原型であるといわれる。
フェルグス・マック・ロイなど、アルスター伝説の英雄が所有する。クーリーの牛争いにおいて、コノートに亡命していたフェルグスはコノート王アリルにこの剣を奪われるが、アルスター軍との戦いに際して返却される。
この戦いでフェルグスはコノール王を殺そうとするが、コナル・ケルナッハに説得され、カラドボルグをふるって王の頭の代わりに三つの丘の頂を切り落としたという。

という伝説が残っている

魅月「こんなもの、貰っちゃってもいいんですか！？」

紫「別にいいわよ、そんな剣の一本や二本」

魅月「剣の一本や二本って、どんな神経してるんですか・・・・」

紫「何か言ったかしら？」

魅月「い、いえ、なんでもありません！ありがたく頂戴します！」

紫「そう、じゃあいいわ。あとそれ矢としても使えるから、いろいろ試してみてね♪じゃあまた来るからね、バイバイ♪」

そう言って八雲　紫は隙間に消えて行った

あいかわらず帰り方が凄いと思っていると、誰かが扉をノックしている音が聞こえた

さとり「魅月、ご飯の時間ですけど、起きていますか？」

魅月「ん、あぁ。起きてるよ、すぐに行くから待っててて！」

さてこの剣、どうやってさとりたちに説明しようかと、悩んでいる魅月がいた

隙間からの贈り物（後書き）

みづきはカラドボルグをてにいれた！！

ちなみに作者はＦａｔｅが大好きです！！！！

スペルカードと役得♪（前書き）

大変お待たせしました、やっとのことで次が投稿出来ました
魅月「なにをやってたんだ（笑）」
作者「え、ちょっといろいろとありまして」
さとり「いい訳は聞きたくないです」
作者「え、ちょま、アッーーーーー！！！」

ピチューン×3

スペルカードと役得♪

魅月が地霊殿にやって来てから一カ月程度が過ぎた
その間に魅月は霊力を少しずつコントロールしていった
最初の頃は弾幕を少しだせる程度だったのだが、今では結構な量の弾幕を出すことが出来る
そして少しながら空に『浮く』程度にまで霊力をコントロールすることが出来るようになっていた
そして次に八雲　紫から授かった『カラドボルグ』
魅月がこの剣を手にしてから、少しばかり魅月の霊力が上がり始めたさとりたちの話によると「元々その剣に宿っていた霊力が魅月に移り始めた」とのことだった
そんなこともあり、なにごともなく地霊殿で平和に暮らしていた魅月だったのだが、ある日の朝食の時に

魅月「さとり、僕になにか仕事をさせてもらえないかい？」

さとり「いきなりどうしたんですか？」

魅月「うん、僕が地霊殿に来てからずっとお世話になりっぱなしだし、流石にこのままじゃまずいかなと思ってきてさ」

さとり「別に気にしなくてもいいんですが・・・・・、それに地霊殿には妖精や私のペットが働いていますので特にやることと言ってもとくには・・・・・」

こいし「それならさぁ、私たちみんなの執事にでもなってもらえば？」

さとりと魅月が会話をしていると突然こいしが割りこんできた

さとり「は？なにを言っているのこいし？」

こいし「だってさー、私たちって結構暇だし、そういう相手ぐらいいてくれてもいいかなって」

さとり「なにを言ってるの？私たちにはお空やお燐とか一杯いるでしょう？」

こいし「そうだけど、お空は灼熱地獄の管理で忙しそうだし、お燐は死体とか集めたり、怨霊とか管理したりしてるし、確かに妖精やペットは沢山いるけど、みんな地霊殿の家事で忙しいじゃん」

さとり「確かにそうだけれど・・・・、まあいいわ、魅月、あなたにはこれから地霊殿で執事をやってもらうけど、いいかしら？」

魅月「僕としては全然構わないから大丈夫だよ」

こうして魅月は地霊殿で執事をやることになり、さとりが魅月に詳しく説明をしようとした時に不意に食堂の扉が開かれて

お燐「いや～流石に徹夜は疲れたね」

お空「うにゅ～～～～、おなかすいたよ～～～」

さとり「ご苦労様二人とも、ご飯を食べたら今日はもう自由でいいわよ」

お燐＆amp;お空「は～～～～い」

さとり「あぁそれと、今日から魅月が執事として働くことになったから」

こいし「今日決まったんだよ～」

お燐「へぇ～執事ねぇ～これから楽しくなりそうだね♪」

お空「うにゅ～？「ひつじ」ってなに～？」

お燐「お空、「ひつじ」じゃなくて「しつじ」だから、いろいろとお世話をする人のことだよ」

お空はイマイチ「ひつじ」と「しつじ」の違いに苦しんでいて、それをさとりは笑顔で見ている
その顔を見た魅月はドキっとしながらも楽しそうに見ており、それをみたこいしは頬を膨らませて怒っているようであった

魅月「さてと、それじゃあさとり様、これからなにをすればよろしいでしょうか？」

さとり「さ、さとり様！？なんですかいきなり！？／／／」

魅月「？いえ、執事らしくこの喋り方の方がよろしいかと思いまして、なにかご不満でしょうか？」

さとり「い、いえ、そういうわけではないですけど（ちょっとかっこよかった／／／）」

こいし「やっぱり魅月は鈍感だね～」

お燐「そうですね、こいし様」

お空「お燐お燐、「どかん」ってなに？」

お燐「「どかん」じゃなくて「どんかん」だよ、意味はね・・・・・・」

さとりが顔を真っ赤にして動揺しているなか、こいしとお燐とお空はお空に意味を教えていた
それを魅月は苦笑いしながら見つめている

魅月「えっと、とりあえずなにをすれば・・・・・」

さとり「え？あぁ、そうですね、何かする前にまず普通の喋り方でいいですよ、その喋り方はやりにくそうですしね」

魅月「え？いいの？まあさとりがそういうならやめるよ」

さとり「素直でよろしい、それとあとこれを渡しておきましょう」

そう言ってさとりは魅月に長方形の白紙のカードを渡してきた

魅月「？、これはなに？」

さとり「それは『スペルカード』、この世界で戦う為に必要なものです。」

魅月「これでどうやって戦うの？なにも書かれてないけど？」

さとり「それは今から説明しましょう、まずはこのカードに弾幕の種類、形状、効果、名前などを書き込みます、そうするとそれがスペルカードになります、試しに一枚書いてみましょう」

魅月「うん、そうだね。でもどういう風に決めようかな」

さとり「そうでうね、大体も方は自分の能力を基本としてスペルカードを考えてますね、例えば、お空で言うなら核融合を基本にした物とかですかね」

魅月「そうなんだ、じゃあちょっと作ってみるよ」

十分後・・・・・・・・・・

魅月「なんとかできた・・・・・・・」

さとり「随分と時間が掛りましたね・・・・・・」

魅月「うん、なかなか名前が決まらなくて・・・」

さとり「はあ、まあいいでしょう。後は暇なときにでも作ってください、お空、お燐！はやくごはん食べちゃいなさい」

お燐「あ、はい。わかりました、いただきます」

お空「ｚｚｚ」

さとり「せめて食べてから寝なさい・・・・、仕方ないわね、魅月、早速だけどお空をお空の部屋に運んでくれないかしら？」

魅月「ああ、わかった、ほらお空」

魅月がお空を背負って、食堂を後にした。
お空は魅月の背中で涎を垂らしながら寝ていて、魅月はなぜか軽く猫背になっていた

魅月「う、なんか背中に柔らかい感触が・・・・・」

魅月は普段あまり意識していなかったが、お空はそれなりに胸が大きかった。
もちろん魅月はあまり気にしていなかったために最初はよかったが、廊下を進むにつれてだんだんと感触を感じていた
魅月が一歩歩くたびに背中に「ふにょん」という感触が背中に伝わり、また一歩歩けば「ふにょん」とまた背中に柔らかいものがあたっている
さすがに魅月と言えど男、これは堪らない為に、だんだんと猫背になっていった

魅月「流石にこれは・・・・早くお空の部屋に行こう」

そう呟きながら魅月は急ぎ足でお空の部屋に向かっていった

スペルカードと役得♪（後書き）

作者「最近お燐とお空の出番が無い」
お燐「どういうことか説明してもらおうか♪」
作者「大丈夫だ、問題ない（ドヤァ」
お燐「・・・・・お空」
お空「爆符『メガフレア』！！」
作者「またかよ・・・・・」

ピチューン

隙間からの贈り物？とカリスマ？（前書き）

九月に入ったのにまだ暑いとは、恐るべし残暑

隙間からの贈り物？とカリスマ？

お空を運び終わった魅月は再び食堂に戻っていた
なかではまだお燐が食事をとっており、魅月が戻ってきたことに気付いたのか、料理を口いっぱいに含めて「ふぉふぁふぇり～（おかえり～）」と若干聞きとりずらいがそう言ってきた。それを紅茶を飲んでいたさとりが「ちゃんと飲み込んでから喋りなさい」とすこし呆れた様子で注意していた。
そこで魅月はこいしがいないことに気づき、周りを見渡してもいなかった、どこにいったんだろう、と魅月が思っていると、

こいし「ねえねえ、こんなもの見つけたんだけどどうかな？」

いきなり魅月の前に現れた、するとこいしの手には黒いスーツのようなものがあった

さとり「？こいし、そんなものどこにあったの？」

こいし「えーっとね、なんか廊下に落ちてた！」

さとり「・・・・・・・・・・あぁ、そういうことね」

さとりは納得したような顔をすると「あの賢者か・・・」などとつぶやいていた
賢者と言う事は多分約八雲　紫だろうと魅月は思った.

すると魅月はこいしが持っている物を見て、

魅月「それ、執事服じゃないか」

こいし「執事服ってなぁに？」

魅月「そのまんまの意味だよ、執事が着る服だよ」

こいし「ふ～ん、じゃあ魅月、これ着て」

魅月「え？なんで？」

こいし「だって魅月は今日から執事なんでしょ？執事はこれ着てるんでしょ？」

魅月「いや、まあそうだけど、どうすればいいさとり？」

さとり「私に聞かれても、でもせっかくですから来てみてはどう？それからでもいいんじゃないかしら？」

魅月「う～ん、まあいいや、じゃあ着換えてくるからちょっとまっててて」

そういって魅月は部屋から出て、自分の部屋に向かった。
そしてクローゼットを開いて今着ている服を脱いでクローゼットにかけて、執事服に着替えた
着替え終わった時に、不意に後ろから物音がしたので振り返ると

紫「あら、結構似合っているじゃない♪」

そこにはベットに腰かけている賢者こと八雲　紫がいた

魅月「えっと、紫さん。いつからそこにいたんですか？」

紫「あなたが着替え終わったあたりよ♪」

魅月「そ、そうですか、それより、今日は何のご用でしょうか？」

紫「別にそんなに硬くならなくてもいいよ？今日はこの間カラドボルグをあげたでしょう？あの時に鞘を渡すの忘れてたから、届けに来たのよ」

そういって紫は隙間から、黒い鞘？というよりケースのようなものを渡してきた

見たところ皮で出来ているようで、見た目は黒く、矢筒のような形だった。

しかも丁寧に腰に巻きつけられるように銀色の鎖が付いていた

魅月「そういえばちょうど欲しかったんですよ、ありがとうございます」

紫「うふふ、別のいいのよ、それより速くつけてみたら？」

そういって紫は急かしてきた、何故だかわからないが、とりあえず執事服のベルトの部分に鎖を巻き付け、
そこにクローゼットにしまっていたカラドボルグを取りだし、鞘？に収め、落ちないように鍔の部分をクリップで止めておいた
そうするとカラドボルグは丁度腰のあたりに来て、右足の方から引き抜く形になった

紫「うん、やっぱり似合うわね♪」

魅月「これだと座る時とかに邪魔になるんじゃ・・・」

紫「そこら辺は頑張ってね♪じゃあ、また会いましょうね♪」

「じゃね～」とか言いつつスキマに入って行った。
それを見届けた後、若干のため息をつきつつ、食堂へと戻った

食堂の扉を開け、中に入るとさとり、こいし、お燐、＋α（妖精やら猫っぽい奴やら）が魅月を舐めまわすように見た
魅月は少し照れながらもみんなに聞いてみた

魅月「どうかな？一応サイズはあったけど」

こいし「うん！物凄く似合ってるよ！」

お燐「うん、似合ってるじゃないか魅月」

さとり「・・・・・・・・・・」

魅月「うん、ありがと。・・・・さとり、大丈夫？」

さとり「ふぇ？、だ、大丈夫ですよ！？（思ってた以上にカッコイイ）／／／」

みんなそれぞれの感想をいっていると、さとりは腰のところにあるカラドボルグに気が付き、

さとり「魅月、その腰にあるものはなんですか？」

魅月「え？あぁ、これは紫さんから貰ったんだ」

さとり「またですか・・・・・・はぁ、困ったものです」

魅月「なにが困った事なの？」

さとり「そういえば魅月は知りませんでしたね、実は地底の妖怪と地上の妖怪にはある条約があってですね、内容は『どちらの妖怪も干渉をしてはいけない』というものがあるんです」

魅月「ふ～ん、そうなんだ、じゃあ紫さんはその条約を違反しているということ？」

さとり「まあそういうことになりますね」

紫「でも今回は仕方がないわ」

突如第三者の声が響いた
その声を聞いたこいし、お燐、＋αは臨戦態勢に入っていた、しかしさとりだけは平然と椅子に座っていた
そして突如魅月の前にスキマが開き、八雲　紫が現れた

さとり「それで、仕方ないというのは、どういう意味ですか？」

紫「魅月のことよ、流石に妖怪だらけの地底じゃ、少し危ないからね」

さとり「それなら私たちがいるから大丈夫ですよ？」

紫「あら、それはどうかしら？いくらここ（地霊殿）が安全だからと言っても、旧都などはどうでしょうね、あそこはこことは違い、あなたたちみたいな優しい妖怪なんてあんまりいないしね」

さとり「それは・・・・・・」

紫「・・・・・まあ、流石にそこまであなたは馬鹿じゃないでしょうから大丈夫でしょうね、それに行くとするならばお供ぐらいつけるだろうしね」

威圧感が凄い、ここにいるだけで魅月は気を失いそうになった

紫「さて、そろそろ私は帰らせていただくわね、それじゃあね魅月」

そういって、紫はスキマの中に入って行った。
紫がいなくなったところでこいしたちは臨戦態勢を解いた、さとりは溜息を吐いて椅子によりかかり、魅月を心配するように声をかけた

さとり「魅月、大丈夫ですか？」

魅月「あ、あぁ。なんとかね・・・・・」

正直言って人間にはかなりつらい状況だった。
人間と言っても魅月は霊力をコントロールできるために、一応は耐えられたが、普通の人間ならばすぐに意識を失っていただろう
それほどまでに迫力ある会話だった。

さとり「とりあえず、今日はもう部屋で休んでいていいですよ、仕事の方は明日からでも大丈夫ですから」

魅月「うん、ごめん。ありがとうさとり」

そういって魅月は食堂を後にした

隙間からの贈り物？とカリスマ？（後書き）

戦闘シーン、早く書きたいなぁ

練習あるのみ。あと悩みが少々（前書き）

久々に投稿します、大変お待たせしました

練習あるのみ。あと悩みが少々

八雲　紫と古明地さとりとの会談？から一週間が過ぎた
あの会談？から八雲　紫は一度も姿を見せてはいないが、魅月はいつも視線のようなものを感じていた
だが魅月はあまり気にすることはなく、今何をしているのかと言うと・・・・・

こいし「ねえ、どうしていきなりこんなこと始めたの？」

魅月「ん？いや、僕もやっぱり強くなきゃと思ってね」

魅月は今、弾幕の練習と、『弓』の練習をしていた

こいし「それってこの間の事があったから？」

魅月「うん、まあそういう事にしといてね」

なぜいきなりこんなことを始めたのかというと、一週間前の出来事が原因である
あのあと魅月は部屋に戻り、今の自分にできることは何か、考えたのである。
考えた結論から言うと、

魅月「・・・・僕が強くなればいいんじゃないかな？」

という結論にたどり着いたからである。
しかし今の魅月に出来ることは限られていた、一つ目はカラドボルグを使った戦闘方法、二つ目は『弓』を用いた方法だ
何故『弓』なのかと言うと、紫がカラドボルグを魅月に授ける際に、

紫「それは矢としても使えるから」

というので、今『弓』の練習をしている。
最初の方はコツがつかめずに苦戦していたが、五日あたりからコツをつかみ始めたのか、段々と上達していった

魅月「・・・・・・ふう、すこし休憩っと」

こいし「お疲れ様♪はい、これ」

そういって魅月にタオルと水を渡した。

魅月「ありがとう、こいしちゃん」

魅月がお礼を言うと、こいしは笑顔で、

こいし「うん、どういたしまして」

と、ない胸をはって威張っていた、そしてこいしは何か思い出し、

こいし「そうそう、魅月はこれからわたしのことはこいしってよんでね」

魅月「え？なんで？」

こいし「だって、おねえちゃんは普通に名前で呼んでるのに、わたしだけ『ちゃん』づけなんだもん」

魅月「ん～よくわかんないけど、わかったよ、こいし」

こいし「うん、それでよし。それより魅月さ、まだその剣、まだ矢に使ってないよね？」

魅月「まあね、どうしたのいきなり？」

こいし「せっかくだから使ってみれば？」

魅月「・・・・・・・・へ？」

こいしからの提案はカラドボルグを『矢』として使って見ればどうかというものだった

だが魅月はすぐに、

魅月「いや、それはごめん無理」

なぜか拒否した。
こいしは不思議に思い魅月に聞いてみることにした

こいし「なんで嫌なの？」

魅月「だってどうやって『矢』として使うのか分からないし、それに飛ばせたとしてもどこかに飛んでったらやだしね」

こいし「それならスペルカードにすればいいんじゃないの？」

魅月「そう考えたんだけど、そうするとこの筒の意味がないしね」

そういって魅月は自分の腰辺りにある筒をみた
この筒は一週間前にもらったものである、例え自分のものになったとはいえ、貰ったものを使わないというのは少し気が引けた、そう思い、魅月はスペルカードにしないのである。

こいし「じゃあどうするの？」

魅月「そうだねぇ・・・・・・・・ん？」

魅月がどうするのかを考えていると、地霊殿の方から見慣れた人、もとい妖怪たちが飛んできた。

さとり「ここにいましたか」

お燐「おにいさん発見♪」

魅月「どうしたのふたりとも？」

さとり「魅月、今暇ですか？」

魅月「まあそれなりに暇だけど、どうして？」

さとり「これからあなたには旧都に行ってきてもらいます、勿論一人ではありません、お燐とこいしも一緒です」

魅月「え？旧都って危険じゃなかったの？」

さとり「えぇ、危険ですよ。あそこには妖怪しかいませんからね、だからこそお燐とこいしも一緒です。二人が一緒にいれば襲ってくることはありませんから」

こいし「わたしも一緒に行っていいのおねえちゃん？」

さとり「そうよ、魅月が危なくなったら助けてあげてね。」

こいし「うん、わかった！じゃあ魅月、お燐、速く行こう！」

魅月「あ、ちょっとこいし待って！」

お燐「こいし様～待ってください～！」

話が終わるや否や、こいしは嬉しそうに旧都にむかい、そのあとをお燐が追い、そしてその後を魅月がカラドボルグを仕舞いながら追った

さとり「・・・・・・・・心配だけど、大丈夫よね。無事に帰ってきてね、魅月。」

魅月達が行った後、ひとり悲しそうにつぶやくさとりがいた。

練習あるのみ。あと悩みが少々（後書き）

どうも暇人マッスーです、やっと十話まで行きました。

次は旧都を書きますのでお楽しみを！

今更ながらキャラ設定（前書き）

やっと十話に行きました、というわけでここでキャラ紹介を入れます

今更ながらキャラ設定

名前　琴原（ことはら）　魅月（みづき）

身長　１７５？

体重　６２．７？

年齢　１７歳と６ヶ月

能力　『加速と減速を操る程度の能力』

特徴　・左手が義手
　　・義手に包帯を巻いている
　　・常に長袖を着ている（結構薄いもの）

服装　幻想入りした時は黒の半袖に黒に近いジーパン、あと黒の薄い長袖といった私服。
執事になってからは執事服。

顔立ち　上の下の上

どうやって幻想入りしたか
常に家にいることが嫌いな為、出かけようとしたが行くところがな

く暇になり、
しかたがないので自転車に乗り適当に走っていたところいきなり目の前に開かれたスキマによりそのまま幻想入り。

能力について
名前の通り、物体の速度を早めたり減らしたりできる。
ただしあくまで速度を増したり減らしたりするだけなので、減速で物体の速度を０にはできない。
加速の場合は一定の速度まで行くと増すことはできなくなる。
能力の応用としては時間の速度を操れたり、弾幕の速度を操り、自分の有利な状況に出来る。
しかしなぜか生物に能力をつかってもなにも起きない。

使用する武器について

武器名　カラドボルグ
長さ　８０？（手持ち部分を含める）
見た目　刀身はドリルのように渦巻いており、手持ち部分は蒼と白の装飾が施されている（Ｆａｔｅのカラドボルグみたいな感じ）

能力　？？？（本編で出てきます）

今更ながらキャラ設定（後書き）

とまあこんな感じです

なに、ちょっとした昔話でも・・・・（前書き）

はいどうも暇人マッスーことマッスーです
今回は少し原作キャラを出したいと思います

なに、ちょっとした昔話でも・・・・

こいしにやっとのことで追いついた魅月とお燐だったが、あまり周りを見なかったせいで、
いつの間にか旧都の入り口まで来ていた。

魅月「ここが、旧都・・・・・・・」

おもわず魅月は驚きのあまり言葉が出なかった。
そこには石造りの家々が立ち並んでおり、一件一件に提灯がぶら下げてあった。
そしてそれが延々と続いているのだ、それはそれ自体が一種の芸術のようなものに見えてしまうほどに。
外の世界では見ることのできないまさに『幻想』のようだった。

魅月「綺麗だ」

こいし「そうかな？あんまり見慣れてるからわからないや」

お燐「それよりも、早くいきましょうこいし様？」

こいし「そうだね、いこ、魅月♪」

魅月「・・・・・あ、あぁ。そうだね」

こいしは魅月の手を引っ張り、その後ろからお燐がついてくる。
歩きながらも魅月は周りを見渡していた、右を向けば様々な妖怪達が魅月達に視線を向け、左を向けばやはり妖怪達が視線を向けていた。
こいしとお燐はあまり気にしていないようだが、魅月は周りからの視線が気になったので、お燐に聞いてみた。

魅月「ねえお燐、なんか周りから物凄く視線を感じるんだけど？」

お燐「あ～、それはねぇ、魅月が人間だからだよ」

魅月「僕が人間だから？」

お燐「そうだよ、基本地底は忌み嫌われた者たちが集まる場所、そのなかには人間に封印されてやってきた妖怪も多いから、未だに人間を恨んでいる奴も多いんだ」

魅月「・・・・・そうなんだ」

『忌み嫌われる場所』
その言葉を聞いた瞬間、魅月は昔を少し思い出した、義手にしてから、周りからは勝手に人が離れて行き、勝手に嫌われていったからである
そのことを思い出してか、魅月は少し悲しい気持ちになった。

こいし「魅月？どうしたの？大丈夫？」

魅月「ん、大丈夫だよ、心配してくれてありがとう、こいし」

どうやら顔に出ていたようである、それを見たこいしは心配してきたのである。
お燐はすこし神妙な顔をしていたが、すぐに切り替えていた

お燐「それよりもさ魅月、外の世界の事でも話してよ」

こいし「あ、いいねそれ♪」

魅月「外の世界、か、何を話せばいいのかな？」

お燐「そこまで難しく考えないでさ、魅月のことでもいいからさ」

こいし「そうだね、よくよく考えたら私たち魅月のことあんまり良く知らないしね」

魅月「そういえばあんまり話してなかったね、でも僕のことなんてつまらないよ？」

お燐「それを決めるのはあたし達だからいいんだよ、そうですよね、こいし様？」

こいし「お燐の言うとおりだよ魅月、なんなら私たちが質問でもしようか？」

魅月「う～～ん、そうだね、僕としては質問してくれるとありがたいかな」

そのままはなしは進んでいった、最初の方の質問は「どんな食べ物があった？」とか「いつもはなにをしていたのか」など、結構軽めの質問だったが・・・・

こいし「はいはい！次はわたし！魅月はお友達はいたの？」

魅月「う～ん、あんまりいなかったかな」

などと色々と突き刺さるような質問ばかり来るのだ。
流石の魅月もこれには少しつらい部分があったのだが、あいては悪気はないのでどうにも言えなかったのであった。

お燐「あんまり？っていうのはどの位だい？」

魅月「う～ん、中学まではそこそこにいたんだけども、高校に入ってからはあんまりいなかったね」

こいし「『ちゅうがく』って？あと『こうこう』ってなに？」

魅月「え～っと、こっちでいうところの、寺子屋？みたいなところかな？」

こいし「ふ～ん、そうなんだ、あ！じゃあ恋人っていたの！？」

魅月「流石にいないけど、なかのよかった女の子ならいたかな」

お燐「へ～、どんな娘なんだい？」

魅月「緑髪で、蛙の髪止めと白い蛇の髪止め？をつけていて、物凄く人気がある子だったよ」

お燐「緑髪ねぇ、確かに少し変わっているね」

魅月「確かに、思い出してみても『色々』と変わっていたよ」

魅月はそう言って思い出していた

まだ魅月が中学三年生の頃

このころの魅月はあまり友人と呼べるものはなく、いつも一人で過ごしている時間が多かった。休み時間は基本、本を読んだり、委員会などの仕事をしていた。

そんなある時、魅月が屋上で本を読みながら、すこしうたた寝していると、不意に横から声が掛けられた。

時間的にはまだ昼休みであり、屋上は魅月以外人がくるということはなかったので気になり、顔を横に向けると、

???「こんなところでなにをしているんですか?」

見知らぬ女子生徒がいた。
とりあえず魅月は質問を返そうと思った

魅月「・・・・・本を読みながら少し寝ていた」

???「そうなんですか・・・・・あの、いきなりこういうのは何ですけども、」

「うちの神社を信仰しませんか?」

魅月「・・・・・・・・・・は?」

???「あ、いきなりすいません!まずは自己紹介でしたね、私の名前は・・・・・」

「東風谷（こちや）　早苗（さなえ）といいます、あなたの名前はなんですか？」

それが、魅月と早苗との出会いだった。

なに、ちょっとした昔話でも・・・・（後書き）

はい早苗さんです。
早苗さんファンの皆様、これから出てくる早苗さんはあくまで作者の頭の中での設定ですので、暖かい目で見守ってください

早く戦闘シーン書きたいな・・・・・・

なに、ちょっと昔話でもＰａｒｔ？（前書き）

大変お待たせしました、申し訳ございません

なに、ちょっと昔話でもＰａｒｔ？

魅月「・・・・・・・そう」

魅月はそういうと立ち上がり、教室に戻ろうとすると、

早苗「・・・・いや、ちょっと待ってくださいよ！？」

魅月「他にもなにか？」

早苗「せめて話だけでも聞いていってくださいよ！」

魅月「いや、僕はそういうのは興味がないからさ」

早苗「そんなこと言わずに、今うちの神社を信仰するともれなく加奈子様と諏訪子様が直々に信託をですね・・・」

早苗がなにやらどこかの悪徳商法のような解説を始めたので、魅月は早々に戻ろうとしたのだが、

早苗「ってだからどこに行くんですか！？人がこんなにも熱心に勧誘をしているのに！？」

魅月「いや、そろそろ授業が始まるし、それにさっきも言ったけど、僕は君の話には何の興味もない」

そういって魅月は屋上のドアを開け、階段を下りていると、後ろから「どどどどどどどど」という音が聞こえたので振り向くと、

早苗「とりあえず話だけでも聞いてくれてもいいじゃないですかぁぁぁぁ！！！」

こちらに向かって叫びながら突進してくる早苗の姿が魅月の視界にはいった。
魅月はそれをみて顔をひきつらせながら階段うぃすばやく降りて、
もう一度早苗を確認しようと後ろを向くと、

早苗「あ」

魅月「あ」

なんと早苗が階段から落ちそうになっていたのである。
流石にあの速度で急には止まれなかったのだろう、などと色々考えた魅月ではあったが、これはまずいと思い、早苗を受けとめようとしたものの、予想外のことが起こった。
なんと早苗は倒れそうな姿勢からいきなりジャンプしたのである、しかも片足で。
魅月はこの行動に驚いて固まってしまっている、そこになぜかジャンプした早苗が魅月を押しつぶす勢いでこちらに迫っていることに

気づいた魅月だったが、時すでに遅く、

早苗「きゃあ！！」

魅月「ひでぶ！！！」

魅月は早苗に押しつぶされてしまった。

早苗「いたたたって、大丈夫ですか！？」

魅月「・・・・・と、とりあえずどいてくれないかな？」

早苗「へ？・・・・・あ！？すいません！！／／／／」

何も知らない誰かが見たら誤解されそうな体勢だった。
下に魅月がいて、上に早苗が乗っかっている状態であった、しかも魅月の目の前には早苗の中学生の割には豊満な胸があった。
流石に魅月もまだ中学三年生、思春期からほんの少し抜けたぐらいの時なので、これは恥ずかしかった、もちろん早苗も同様であった。
すぐに早苗は魅月の上からどいて、すぐに立ち上がり、続いて魅月も立ち上がり、すぐに立ち去ろうとしたのだが、

早苗「あ、ちょっと待ってください！」

早苗は魅月の左手をつかみ（この頃はまだ左腕は健在）魅月を引き留めた、今度はなんどとおもいながらも早苗の方を向き、

魅月「今度はなんだい、信仰ならしないと言ったはずだけど？」

早苗「いえ、あの、その、ですね・・・・名前とクラス、教えてもらってもいいですか？」

なぜか顔を赤らめながら聞いてきた。
魅月は特に言ってはいけないこともないので、言うことにした。

魅月「琴原　魅月、琴に草原の原に魑魅魍魎の魅に月と書く、３年Ａ組だよ」

早苗「琴原　魅月くんですね、わかりました」

そして二人の間に少しの沈黙がながれ始めたころに、授業開始のチャイムが鳴り響いた

魅月「もうこんな時間か、じゃあね」

早苗「え？、あ、はい」

そう言って魅月は教室に戻った。

それからというもの、早苗は暇さえあれば魅月を訪ねていた。
魅月は毎回うっとおしそうに構っていたのだが、段々と普通に会話をしていった、一方早苗は最初の方はすぐに帰っていたのだが、段々とすぐに帰らなくなっていった
暫くそういう事が続いていたのだが、魅月が中学3年の頃に、左腕を失い、それから早苗と会う事はなくなった。
なくなったというより、単純に魅月が違う学校に行ってしまった為に、会えなくなっただけであるが、結局は別れの言葉を言う事はできなかったので、魅月は少し気にしていた。

魅月「ざっとまあ、こんな感じかな」

結構長く話してしまったと思い、お燐とこいしの方に向くと、

お燐「これおいしいですね、こいし様♪」

こいし「うん、この脂の乗り具合がなんともね」

魅月「・・・・・・・・・・話聞いてなかったでしょ」

お燐とこいしは何処かから買ってきたのか、焼き鳥のようなものを食べていた、それを見た魅月は若干イラついたものの、我慢した。

魅月「まったく、人が折角あんまり話したくないこと話したのに」

こいし「ごめんね魅月、これあげるから機嫌なおして？」

お燐「大体それぐらいで怒ってるとはげるよ魅月？」

という感じで話していると、

「おいそこの人間、ちょっと待て」

なんだと思い、魅月が振り向くと、

「お前に怨みはないが、死んでくれ」

拳を頭上に振り上げている鬼？の妖怪がいた。

なに、ちょっと昔話でもＰａｒｔ？（後書き）

次は戦闘シーンです。
やっと書ける、書けるぞ！！！

鬼さんこちら、手のなる方へ（前書き）

やっとのバトルシーンです、でも少ないです
あとやっと主人公がスペカを使います

鬼さんこちら、手のなる方へ

魅月「！？」

魅月は間一髪のところで避けることに成功した。
そして魅月は攻撃してきた奴を確認した、人間と比べると明らかに赤い肌、額に生えたいる角、この時点で魅月は、自分に攻撃してきたのが鬼だと判断した。
魅月は自分がさっきまでいた所に目をやると、石でできている地面が粉々になっていた。
もしも自分があそこにいて、避けきれなかった時のことを考えるとぞっとした。
そうして考えているうちに、攻撃してきた鬼が魅月の方を向いて、

「仕留めそこなったか、まあいいや、そこ動くなよ、すぐに殺してやるから」

そういって鬼はこちらに歩きながらむかってきた。
魅月はこいし達に助けを求めようと周りを見渡したのだが、どういうわけかさっきまで隣にいたのにいつの間にかいなくなっていた。
そうこうして魅月があわてていると、いつの間にか鬼が魅月の目の前に来ていて、またその拳を振りかぶっていた。
咄嗟に魅月は腰に差してあるカラドボルグを引き抜き、鬼のパンチをガードした、だが、相手は鬼である。
人間と比べるとはるかに力が違うのだ、勿論、魅月はそんなことしているはずもなく、カラドボルグごと殴り吹き飛ばされた。

そしてそのまま吸い込まれるかのように、壁に思いっきり激突し、口からは胃液と血が少し混ざったような色をした液体が出た。
魅月は苦しみながらも立ち上がり、鬼を見据えて剣を構えた、そしてその姿を見た鬼は感嘆の声をあげた。

「ほう、耐えたのか。人間はもろかったはずなんだが、意外だな」
魅月「それはどうも、一応そこそこには鍛えていたものだからね」
「ふむ、まあいい。どの道お前はここで死ぬんだからな」
魅月「残念ですけど、自分はまだ死ぬつもりはありませんので。」
鬼と魅月は少し会話をすると、お互いに構えた。

こいし&お燐　Side

お燐「ねえこいし様、ほんとうにこれでよかったんですか？いくらさとり様の命令とは言え、これは流石に・・・・・」

こいし「うん、わかってるよ。でも、こうでもしないと、魅月は生きてはいけないからさ」

お燐「でも、このままじゃ魅月は・・・・・」

なぜこいしとお燐がこんなことをしているのかというと、さとりの頼みであったからである、その内容は、

さとり「これからあなた達には旧都に行ってきてもらうわ、勿論魅月も一緒よ」

お燐「さ、さとり様！？いきなり何を言ってるんですか！？」

こいし「そうだよおねえちゃん！ついに魅月が好きすぎて頭がイカれちゃったの！？」

さとり「な、なにをいってるのこいし！そうじゃなくて、これは魅月の為なの！」

こいし「魅月の為って一体どういう事なの？」

さとり「この間もあのスキマに言われたでしょ、それで私はちょっと考えたの。どうすれば魅月を幻想郷（この世界で）生きていけるかってね」

お燐「でもそれなら私たちがそばにいれば・・・」

さとり「確かにそれも一つの手よ、でもそうすると魅月はこの厳しい世界では生きてはいけないのよ、それはあなた達もわかるでしょ」

こいし「たしかにそうだけど、でもいったいどうするの？ましてや旧都になんか連れていって？」

さとり「そこなんだけどね、じつは・・・・・・」

その内容を聞いた時、こいしとお燐はさとりの正気を疑った、その内容はこうであった

まず最初に魅月を旧都に連れ出すこと、その次にあらかじめそのことを鬼達に伝えておき、魅月を鬼達に襲わせる、といったものだった。

その結果、今の状況に至ったというわけである。

そしてその様子を屋根の上からこいしとお燐が見下ろしていた、その二人の顔は真剣そのものであった。

お燐「あぁ！あぶない！そこは右じゃなくて左だって！！」

こいし「お燐、心配なのはわかるけど、静かに見てようよ、あんまり大きい声だすと魅月に見つかっちゃうから」

お燐「あ、すいません。でも、こいし様はしんぱいじゃないんですか？」

こいし「そんなの・・・・・・・」

こいしは少し間を開けてから、

こいし「心配にきまっているじゃない」

悲しげにお燐につぶやいた

魅月Ｓｉｄｅ

魅月「くそ、流石に実際の殺し合いともなると、キツイな」

魅月はそう呟いた、いくら武術の心得があるといっても、魅月が知っているのはあくまで形だけである。
そんな形だけでの武術では、人を殺すことなど出来はしないのである。
どうすればこの危機的状況を打破するか考えながらも、どうするか考えていると、

「どうした人間、お前は弾幕やらスペルカードを使わんのか、このようになぁ！」

鬼は自分の拳を横に振るうと、振った後を追うように丸い弾幕が五つほど現れ、魅月に向かって発射された
そこで魅月は、弾幕とスペルカードの存在を思い出した。
これで反撃できる、そう思いながら、鬼が放った弾幕を能力で速度を減らし、全て避けきると同時にポケットからスペルカードを取り出し、掲げて宣言した。

魅月「速符『スピードダイヤモンド』！」

魅月がそう宣言すると、魅月の前に四つのダイヤの形をした弾幕が現れ、各一個ずつから7方向にダイヤモンド型の弾幕が発射されていく

だがなぜか、この弾幕、遅いのである、これを見た鬼は余裕の表情で弾幕をかわしていく

「こんな遅い弾幕じゃあたりはしない・・・っッ！！」

が、なんといきなり弾幕が早くなったのである、流石にこれには鬼も驚き、何発か被弾してしまった。
しかしその場所にいつまでもいるわけはなく、弾幕のあいている隙間に逃げようと急に早くなった弾幕を避けていると、

「なんだ！？、今度は遅くなっぐあ！！」

今まで速かった弾幕が急に遅くなったために対応できずに、また何発か被弾してしまった、これには流石に鬼もキレ始めた。

「おのれ、人間の分際でぇ！！！」

対する魅月は真剣な表情で、

魅月「さて、やっとすこし慣れてきたぞ、今までは練習だったから本気では出来なかったけど、相手が鬼なら話は別だよ！！」

鬼さんこちら、手のなる方へ（後書き）

スペカ説明～（ドラえもん風に）

速符『スピードダイヤモンド』
使用者の前方にダイヤモンド型の四個の弾幕が現れて、そこから一つにつき7方向に向かって弾幕が発射される。
最初の弾幕は遅いが、一定時間経つと早くなったり、遅くなったりと交互に繰り返すスペルカードです。

油断大敵（前書き）

ついに鬼と魅月のバトルに決着が！！！
はたして勝つのはどちらか！？

油断大敵

こいし&ｓｉｄｅ　お燐

お燐「魅月、やっと弾幕出しましたね」

こいし「うん、これなら一応戦えるね」

勇儀「お、派手にやってるね♪」

こいし「あ、勇儀だ。勇儀も見に来たの？」

勇儀「まあそんなとこだね、ちなみに今はどんな感じだい？」

お燐「魅月が弾幕で有利になってるところからだよ」

こいしたちが魅月を見ていると、勇儀がやってきた。
彼女は別名『鬼の四天王』と呼ばれており、彼女のほかにもあと三人の四天王が存在する。
そして、さとりの考えを最初に聞いたものであり、魅月に鬼を差し向けた本人でもある。
ちなみに今の服装はいつもの体操服ではなく、蒼の花の模様が入った着ものである、しかも胸元がやとらと開いているが、勇儀は気にしてはいなさそうである

勇儀「ふ～ん、魅月って弾幕だせたのかい？」

こいし「出せるようになったのは一カ月ぐらい前からだよ、といってもまだまだだけどね」

勇儀「まあ出せるだけいいじゃないか、魅月と今戦ってる奴なんてちょっとしか弾幕が出せないからね」

お燐「あれ？勇儀？確か魅月と戦わせる鬼ってそこそこ強い奴じゃなかったっけ？」

勇儀「あれ？そうだったっけ？まあいいじゃないか、どちらにせよ相手になるのは鬼だ、人間が相手じゃどの鬼も大差ないさ」

そう言って勇儀は手に持っているお気に入りの赤い杯を口に当て、傾けた。

魅月　ｓｉｄｅ

勇儀たちが屋根の上で話をしている頃、魅月は鬼の攻撃を次々とかわしていた。
たまに弾幕を放ってくるが、落ち着いて避けては弾幕を鬼にむかって次々と発射していた。
鬼はと言うと、攻撃を避けられてばかりいるせいで、怒りに我を失って魅月を攻撃していくが、動きが単純な為に、魅月に避けられてしまっている。
そして鬼が魅月を殴ろうとその拳を突き出すものの、魅月はそれを落ち着いて避ける、そのまま鬼は勢い余って壁に突っ込んでしまった。
魅月はここぞとばかりに弾幕を穴が開いた壁に向かって発射していく。
そしてある程度撃つと撃つのを一旦やめ、鬼がいる場所を見る、だがしかし鬼が出てくる気配はなく、さっきの弾幕で倒せたと思い、油断をしてしまった。
魅月が肩の力を抜いたのと同時に、壁から巨大な岩が飛んできた、魅月は油断していた為に、反応が遅れてしまったものの、なんとか剣で防ぐことができた。
だが、勿論岩の勢いを殺すことなど出来るはずもなく、そのまま壁に岩もろとも吹き飛ばされてしまう。

魅月「ぐ！っがは！！」

壁にぶつかると同時に魅月の口から血を吐きだした、苦しみながら鬼がいるであろう方向をむくと、そこには直径３０ｃｍはありそう

なハンマーを持っていた。
鬼はニタリと不気味な笑みを浮かべると、魅月にどんどん近付いてきた。

「よくも散々やってくれたな人間、少し油断したぞ」

魅月「それ・・は・・・ど・うも」

「ふ、痛みのあまりまともに喋れないか、まあいいだろ。本当はお前の悲鳴を旧都に響かせようと思ったのだが、しかたあるまい。だが、その代わりに体の部位を順番にこのハンマーで潰してやる」

そういって鬼は魅月の頭を掴み、宙に浮かせた後、そのまま地面にたたきつけた、それと同時に魅月の口から苦悶の声がこぼれた。

こいし&お燐&勇儀　side

お燐「こ、こいし様！！このままだと魅月が、魅月が！！」

勇儀「おいおい、あいつ。いくら人間に恨みがあるからって、流石にやり過ぎだろう、どうするんだいこいしちゃん？」

こいし「いや、まだだよ、まだ、助けるには・・・・」

お燐「なにを言ってるんですかこいし様！？このまま魅月が死んじゃってもいいんですか！？」

お燐は目の前で、一カ月といえどともに暮らした、いわば『家族』のような魅月が殺されると思い、あたふたしている、しかしこいしと勇儀は平然とした顔でその様子を見ていた。

お燐「っつ！こうなったらあたいが自分で・・・！！！」

勇儀「待ちな！」

お燐「勇儀！！なんで止めるのさ！！」

勇儀「少しは落ち着きなよ、ここはおとなしく見ているんだ」

お燐「で、でも！！！「お燐！」っつ！」

こいし「今助けに行ったら、何のために魅月を旧都に連れてきたの？わざわざ怪我をさせるために連れてきたんじゃないでしょ？」

お燐「それは、そうですけど・・・・でも！」

こいし「この程度で死ぬようなら、魅月がそれだけの人間だったってことだよ、ここは地底、『忌み嫌われし者』が集まる場所、そして、幻想郷でも指折りの危険な場所なんだよ、その意味がわかるでしょ？」

お燐「・・・・・・・・・」

こいしの説明にお燐は沈黙をしてしまった、勿論こいしの言ったことが正しいからである。
ここは地底、『忌み嫌われし者』が集う場所であり、もっとも危険な場所である。鬼に勝てないようでは、人間がこの世界（地底）では生きてはいけないのである。

魅月　ｓｉｄｅ

魅月は必死にこの状況を打破するか考えていた、痛みのあまり体は満足に動かすことが出来ずに、更には目の前には巨大なハンマーを掲げた鬼がいる。
必死にかわそうと試みるも、体が動かないのである、つまり、避けられないのである、そんな魅月を見下しながら、勝利したような顔をした鬼がいる。

「そうだなまずは腕から潰していくとするか！」

鬼がそう言うと同時にハンマーを振り下ろしてきた。

ぐしゃり

あたり一面に、なにかが潰れたような音が響いた。
こいしたちは、その様子を見て、息をのんだ。
一方鬼は勝者のような笑みを浮かべて、大声で笑おうとしたのだが、
そこであることに気づき、驚いた。

そして、こいしやお燐、勇儀もその光景をみて驚きを隠せなかった。

血が、出ていないのである

普通、人間が腕などを潰された場合、辺り一面に血が飛び散り、潰されたものは悲鳴をあげるはずなのだが、周りには血が飛び散っていないどころか、魅月の悲鳴さえ聞こえない。鬼はなぜ、と思い、魅月を見た。
だがそこで見たのは、腕を潰されて苦しみもがいている魅月の姿ではなく、カラドボルグで鬼の腹を貫いている魅月だった。
そう、鬼が潰したのは、義手である左手だったのである。

魅月「悪いけ・・ど・僕の・・・勝・ち・・・・・」

そういって魅月は意識を失った。

油断大敵（後書き）

鬼が潰したのは左なのでしたー

ここは？・・・・・・ああ、地霊殿か（前書き）

今回は駄目文ですので、あまり期待しないでくださいね

ｂｙ作者

ここは？・・・・・・ああ、地霊殿か

魅月「ここは・・・・地霊殿？」

魅月が目を覚ますと、最初に視界に入ったのは地霊殿の天井だった。
不思議に思い、魅月は何があったのか思い出そうと、ベットから起きようとすると、

魅月「ッツ！あぁ・・・！！」

突如体に激痛が走った。
何事かと思い、自分の体を確認すると、上半身には包帯が巻かれており、腕や足にも包帯が巻かれていた。
そこで魅月は自分が鬼と戦った事を思い出した。

魅月「そう、か・・・・僕は鬼と・・・・・ッツ」

思い出すたびに傷口が痛み出していった、なんとか抑えようとし、
思い出すのをやめていると、不意にドアが開かれる音がした。
誰か来たのか？と思いドアの方に顔を向けると、

さとり「あ・・・・・・・・」

そこには、とても不安そうな顔をしたさとりが立っていた。
魅月は、さとりになぜ自分が寝ているのかと理由を聞こうとしたとき、、

さとり「魅月！！」

魅月「さと・・ぐ！！」

さとりが魅月に抱きついたのである。
魅月は何が何だか分からずに、痛みに顔を顰めながらも、さとりに話しかけようとして、あることに気づいた。
さとりは、魅月に抱きついたまま、泣いていたのである、そのことに気づいた魅月は、どうしようかとうろたえていると、

さとり「魅月、ごめんなさい」

魅月「・・・・え？」

突如、さとりが泣きながら謝ってきたのである。
とりあえず、魅月はさとりが落ち着くまで抱きしめていた。
それから１０分後にさとりは泣くのをやめて、魅月を見ながらこう言った。

さとり「魅月、本当にごめんなさい。あなたを旧都に向かわせて、

鬼と戦わせるようにしたのはわたしです」

魅月「え？それって一体どう意味？説明してくれる？」

さとり「はい、勿論です。まずは・・・・・」

さとりは、全ての事を話した。
八雲　紫に言われたこと、さとりが悩んだこと、そして、魅月が地底でどうやって生きていけるかなど、色々と考えた結果、『鬼達に力を示す』ということになったのである。

魅月「そう、だったんだ」

さとり「はい、本当に申し訳ありませんでした」

魅月「さとり、もう謝らないでいいよ」

さとり「でも、魅月は私のせいで・・・・・」

魅月「・・・・・しかたないなぁ」

そういって魅月はさとりに手を伸ばした。
さとりはビクッとしながら、来るであろう衝撃をまった。
だが、いつまでたっても衝撃が来ないので、さとりは不思議に思っていると、

魅月「心配してくれて、ありがとう」

さとりは魅月に抱かれていた。

さとり「魅月？」

魅月「さとり、ぼくは怒ったりはしないよ、だって、全部僕のことを思ってやってくれたんでしょ？」

さとり「で、ですけど、そのせいで魅月は怪我をしましたし、それに左腕だって・・・・」

魅月「それは僕が弱かったからだよ、さとりのせいじゃない、それに左腕は元々なかったしね」

さとり「・・・え？なかったってどういうことですか？」

魅月「僕はね、中学生の頃に、指名手配犯、つまり悪人に腕を切り落とされたんだ」

魅月はこの時初めて自分の過去をさとりに明かした、さとりは驚きながらも魅月の話を聞いた。
腕がなくなってからの出来事や、周りから見られる目が変わった事、そして孤独になった事、全てを話した。

魅月「という感じで僕はいつもひとりだったんだ、でもね、こっち

に来てからはそれらは大きく変わったんだ。
ここにはさとりやこいし、お燐やお空とか、色々な人がいて、みんな物凄く優しいんだ、あっち世界では二度と感じることのできなかったものが、ここでは感じられるんだ、僕はそれだけでも十分だった。
それなのに、僕をこんなにも心配してくれる人たちがいるんだ、だから僕は怒ったりしないよ」

さとりは魅月の話しを聞きながら知らず知らずのうちに涙を流していた。
さとりは本来覚妖怪である、その為に周りから嫌われ、いつも孤独だった、それゆえに、魅月の話を聞いたさとりは昔の自分を思い出していたのである
「このひとは、私に似ている」さとりは心の中でそう思った。

魅月「さとり、もうお願いだから泣かないで」

さとり「・・・！す、すいません、つい昔のことを思い出していて」

魅月「そう・・・・・ねえさとり、一つだけいいかな？」

さとり「はい、なんですか？」

魅月「こんな僕だけど、ここにいてもいいのかな？」

さとり「・・・なにをいっているんですか、そんなの・・・・」

さとり「いいにきまってるじゃないですか」

その言葉を聞いた瞬間、魅月は、地霊殿に来てから初めて涙を流した。
さとりは何も言わずに、魅月を思い切り、やさしく抱きしめた、そのなかで魅月は、腕をなくした時から、初めて人前で泣いたのである。
そして魅月はある程度泣くと、さとりの顔を見た、その顔は涙の跡が残っていたが、とても可愛らしく、そして聖母のようにも見えた。
そのまま、さとりの顔に顔を近づけていき、その距離はお互いの息がかかるほどに近くなった。
さとりは、とてもやわらかな笑みを浮かべながら、魅月の顔を引き寄せ、お互いの唇が触れ合うまであと1センチまでいったところで・・・・

こいし「じーーーーーーーー」

お燐「わくわく、わくわく」

お空「うにゅ？」

入口から覗いている三人と魅月の目があった。
さとりは何事かと思い、ドアの方を向くと、そのまま固まってしまい、顔が一気に赤くなった。

さとり「あ、あなたたちーーーーーー！！！！！！！」

こいし「あ！みつかった！、みんな逃げろー！！」

お燐「にゃーー！！」

お空「うにゅ？」

さとり「待ちなさーい！！！／／／／／／」

さとりはそういって部屋から出て行ってしまった。
残された魅月は、顔を真っ赤にしながら布団に倒れこむのであった。

ここは？・・・・・ああ、地霊殿か（後書き）

はい、駄目文でした。

次回は魅月の左腕についてです

暇、義手、そしてだれ？（前書き）

ほんとうにお待たせしました！！
最近課題とか課題とか課題とかまあいろいろあって全然てをつけられなかったです！！！

暇、義手、そしてだれ？

鬼との戦闘から約１週間程度が過ぎた。
その間に色々な事があり、魅月はさとりとともに対応に追われていた。
魅月の義手のことや、部屋でないがあったのかなど、まあいろいろとあった。
怪我の具合はというと、なぜだか一週間がたった辺りからほぼ完治していた、さとりいわく、

さとり「多分八雲　紫がなにかしたのでしょう」

とのことだった。
それだけで大体魅月は納得していたが、こいしたちはいまだにわけがわからないという感じである。
そんなこんなで、今魅月は部屋で寝ていた、怪我が治ったからといって、流石にまだ仕事をやらせるわけにはいかないと、地霊殿メンバーから全員で止められた。（仕事と言ってもただの遊び相手である）

魅月「流石に暇だな、でもやることもないし、義手も壊れたからなぁ」

とこれから先のことを考えていると、ドアがノックされている音が聞こえた

魅月「ん？誰？あいてるけど？」

さとり「失礼します魅月、ちょっといいですか？」

さとりが部屋に入ってきた、しかし若干顔を赤らめながら目線を余り合わせようとしない、それは魅月も一緒であった。
この間の事があってから、ふたりは会うたびにこんな感じであった、流石にあんなことがあったせいである（詳しくは前話参照）

魅月「えっと、どうしたのさとり？」

さとり「は、はい。実は義手のことなんですが・・・・」

魅月「義手がどうしたの？」

さとり「流石にそのままじゃいろいろと不便かなと思って、いろいろ探しましてね、こんなものがあったんですが・・・・・」

さとりはそういうと、どこからか布に巻かれた何かをとりだし、布をとっていった。
そこから出てきたのは、まるでどこかの騎士がつけていそうな黒い手甲だった。

魅月「それが、義手？どちらかといったら手甲にしか見えないけど

？」

さとり「外見はそうですが、これは霊力をこれに通すと、まるで自分の腕のように動かすこともできるんです」

魅月「すごいねそれ、それなら僕でも使えるね」

さとり「はい、ですが、これには少々問題がありまして・・・・」

魅月「問題って、なにかあぶないものなの？」

さとり「いえ、そういうわけではないんですが、まあ説明しますと・・・・・」

さとりがいうにはこれは『地獄の手甲』というらしく、元々は地獄の門番がしていたもので、これがあると自由に地獄に出入りでき、しかもこれをつけるという事は、地獄の門番になるという意味でもあった。

魅月「なんというか、すごいものだったんだねそれ」

さとり「はい、でも今は地獄は別の場所にあって、それほど意味を持たないものなんです。」

魅月「じゃあ何が問題なの？」

さとり「実はこの手甲、妖力をもっていまして、まあ簡単に言うとこれ自体がすでに妖怪なんです」

魅月「ようするに付喪神(つくもがみ)ていうものかな？」

さとり「はい、そのようにとらえてもいいです」

魅月は付喪神について思い出していた。
付喪神とは、名前に『神』という字がはいっているが、決して神ではなく、昔の人々は精霊か何かだと思っていたという説もあった。
本来付喪神とは器物が百年を経過するとそこに宿るとされていた。
ちなみに人に害を加えるといわれている。

魅月「まあ、多分大丈夫だと思うけどなぁ」

さとり「ですが、万が一という事もありますし、他のも探しますが・・・」

魅月「いや、それで十分だよ、例え何がきても、なんとかするさ、僕には能力もあるしね」

さとり「そうですか、わかりました。ではどうぞ」

さとりは渋々渡してきた。
まあそれだけ心配してくれているんだろうと思い、魅月は嬉しくなった。

魅月「しかし、これどうやってつけるんだろう？」

さとり「そのまま着けてみてはどうでしょうか？」

魅月「えっと、こうかな・・・ッツ！？」

魅月が手甲を左腕に取り付けると、鈍い痛みが全身を走り、手甲が輝きだした。
この光に魅月とさとりが目をくらましたが、すぐに輝きが収まった。

魅月「な、なんだったんだろ、今の輝き？」

さとり「さあ、わたしにもなにがなんだか？」

いろいろと調べてみたが、あまり変わった様子もなかったので、魅月は早速手甲に霊力をいれると、まるで自分の腕のように、動いた。
これには魅月は子供のように騒ぎ、歓喜の声をあげた。

魅月「すごい！こんなに自由に動くなんて！！」

さとり「ふふ、気に入りましたか、魅月？」

魅月「うん！！ありがとうさとり！！大事にするね！！」

魅月はそう言ってさとりを抱きしめた。
その途端さとりは顔を真っ赤にしながら、物凄いスピードで「そ、

そそ、それではしちゅれいしましゅ！！！！」と噛みながら恥ずかしそうい出て行った。
魅月はこれに気づき、顔を赤くしながらさっきのことを恥じた。

魅月「お、思わず抱きついちゃった・・・・・でもさとり、いいにおいだったな」

自分以外誰もいなくなった部屋でポツンと独り言を言っていた。

それから、いつのまにか夜になり、睡魔が襲ってきた魅月は自分の部屋に戻り、そのままベットで横になった。
しばらく天井を眠そうな目で見ていると、不意に、布団が盛り上がった。
最初はこいしが忍び込んだと思い、声をかけようとしてあることに気づいた、こいしにしては、若干、いや、あきらかに大きさが違ったのである。
じゃあ、一体だれが・・などおもいつつ、布団をめくると・・・・・・

魅月&？「「あ」」

そこにいたのは、黒髪の、自分と同い年位の少女がいた。

暇、義手、そしてだれ？（後書き）

マジ課題とかテストとか爆発しろ！！！！！

ちょっと変わった従者ができました（前書き）

オリキャラとうじょうです、お楽しみに！

つかやっと冬休みになったので暇ができました

ちょっと変わった従者ができました

月は多少驚いたが、落ち着きながらも冷静に少女に話しかけた。

魅月「えっと、君は・・・・」

？「・・・・申し遅れました／／／」

少女は若干顔を赤らめながらも、ベットからでると魅月の前に立って説明を始めた。

黒百合「わたしは、今あなた様が左腕につけられている手甲の付喪神、名前は黒百合（くろゆり）と申します、以後お見知りおきを」

魅月「黒百合か、いい名前だね、僕は「琴原　魅月様ですね」・・・なんで知ってるの？」

黒百合「ずっと聞いてましたから」

そういって黒百合はドヤ顔をしてきた。
なんでも魅月が地霊殿に来た時から知っているらしい、不思議に思い聞いてみると、

黒百合「それは私の能力でございます、私の能力は『音を聴き取る

程度の能力』でございますから」

と普通に返された、黒百合の説明曰く『音を聴き取る程度の能力』は遠く離れた音も聞きとれるという、いたって強くはない能力であった。

だが本人曰くこれはこれで結構暇をつぶせるらしい、例えば遠くで話していることの内容を聞いたりなどでずっと暇を潰していたらしい。

魅月は若干苦笑しながらも、黒百合の格好を見た、見た感じは黒のメイド服と言った感じであった（イメージとしては十六夜咲夜の蒼い部分を黒くして見たのをご想像ください）

魅月が服装を見ていると、黒百合は恥ずかしそうに身をよじり、顔を少し赤らめながら息を荒くし、

黒百合「そんなに、見ないでください。恥ずかしさのあまり興奮してしまいます。」

魅月「・・・・・・・・は？」

黒百合の発言を聞いた魅月はフリーズしてしまった。

どうやら、黒百合は他人に見られることで興奮してしまう、という変わった性格の持ち主のようだった。

黒百合「そんな目で見ないでください、はあはあ」

魅月「えっと、とりあえず落ち着こうよ」

約十分後・・・・・・・

魅月「落ち着いたかい、黒百合？」

黒百合「はい、申し訳ありませんでした。久々にこの姿になれたですから興奮してしまって」

魅月「そう、じゃあ聞くけど、黒百合はこれからどうするの？」

黒百合「どうするもなにも、私はご主人さまについていくだけです」

魅月「もしかして、そのご主人さまって、僕のこと？」

黒百合「他に誰がいらっしゃるんですか？」

魅月「いやいやいや、なんで僕がご主人様なの？」

黒百合「なんでって、今ご主人様がつけてらっしゃる手甲の持ち主は魅月様ですよね？」

魅月「それは確かにそうだけど？」

黒百合「つまり、私自身がその手甲なのでございますから、私のご主人様は魅月様になります。というわけでこれから末永くよろしくお願いしますね♪」

そういって黒百合は綺麗な姿勢でお辞儀をしてきた。
正直魅月は如何しようかと思っていたが、黒百合を見てもう説得は無理と考えたので諦めることにした。

魅月「まあ、とりあえずこれからよろしくね、黒百合」

黒百合「はい、ご主人様♪」

魅月「じゃあ早速だけどさ「お仕置きですか？」違うから！そうじゃなくて！なんか黒百合ってのは呼びにくいからさ、百合って呼んでもいいかな？」

百合「私としてはどちらでもいいのですが、ご主人様がそうお呼びしたいのであればご自由にどうぞ♪」

魅月「うん、じゃあ改めて、これからよろしくね、百合」

こうして挨拶を済ませた後、魅月はあることに気が付いた

魅月「そういえば、百合はどこでねるんだい？」

百合「それは勿論、ご主人様と一緒のベットです♪」

魅月「・・・・・・は！？いやいやいや、それはまずいから！！」

百合「じゃあどこで寝ればいいんですか？」

魅月「それは、まあ、う～ん」

百合「ご主人様、今日だけは一緒に寝させてくれませんか、お願いします」

魅月はすこし考えたが、仕方ないと思い渋々了承した。
すると百合は嬉しそうな顔をして魅月のベットに入ってきた、そして魅月に抱きつき始めたのである。

魅月「ゆ、ゆり？離してくれないかな？／／／」

百合「久々にこの姿になって、しかも人の肌に触れるなんてこと初めてですので、できれば暫くこのままでお願いいたします」

魅月はしかたなく了承したが、今の体制は魅月の背中から百合が抱きついているという形になっているために、魅月の背中にはとてつもなく柔らかいものが当たっているのであった。
これはまずいと思ったが、百合はもう寝てしまっている為に、しかたなく魅月はドキドキしながら眠れずに、結局朝まで起きていたのであった。
勿論次の日に起こしに来たさとりに見つかっていざこざが始まるのはまたのお話。

ちょっと変わった従者ができました（後書き）

百合の詳細についてはそのうち紹介したいと思います。

朝から喧嘩、そしてまた喧嘩（前書き）

みなさん、あけましておめでとうございます！！
どうかこれからも『東方地底郷』を応援よろしくお願いします！！
！

朝から喧嘩、そしてまた喧嘩

魅月に従者の百合が出来てから、約一週間程度が過ぎた。
その間にも色々な事があり、毎日が楽しくそれはそれは騒がしい毎日であった。
そして今日も大食堂のにて、激しい口論が繰り広げられていた。

さとり「ですから！貴女一体なんなんですか！？今日も魅月のベットで一緒に寝ているだなんて！？貴女にはちゃんと自分の部屋があるんですからそっちを使ってください！！！」

黒百合「なにを言ってらっしゃるんですの、この『小五ロリ』は、私とご主人様の関係をあなたなんかにどうこう言われる筋合いはありませんのよ？」

さとり「な、しょ、『小五ロリ』ですって！？小五という意味はよくわかりませんが、ロリとはなんですかロリとは！？私だってそこそこ胸はありますし、背もそれなりにあります！！」

黒百合「あら、その程度であるとおっしゃるのはどの口かしら？そういうのは周りをちゃんと見てからいいなさい、そうですよねご主人様♪」

魅月「いや、そこで僕に振られても困るんだけど・・・・」

今日も朝から修羅場である、そう魅月が思っていると、食堂のドアが開きこいし達がやってきた

こいし「おはよ～って、うわぁ、今日も朝から凄いねぇ」

お燐「ドロドロだねぇ」

お空「うにゅ？なにがドロドロなの？」

お燐「あ～、お空は知らなくても大丈夫だよ」

お空「そうなの？じゃあいいや！」

こいし「それにしても、魅月はモテモテだねぇ、ひゅーひゅー」

魅月「こいし、僕的にはあんまり嬉しくなんだけど」

お燐「またまた、本当は嬉しいくせに～」

お空「両手に花ってやつだよね！？」

お燐「なんであんたはそういうことは知ってるのさ・・・」

こいしたちはこんなことを言ってはいるが、最初の頃は物凄かった。
まず最初に口喧嘩からはじまり、やがては弾幕ごっこまでに発展したのである。
流石にまずかったので、お燐や妖精、ペット達を総動員して止めたのである、因その時の魅月はその時能力で弾幕の速さを減速させていたりした
因みにこいしはお空と遊んでいたのでその場にいなかったのは全く

の余談である

みなが朝食を取り終え、各自の仕事の仕事をしていた。
さとりはなにかの書類にサインなどをし、こいしはどこかに行ってしまい、お燐は死体集めへ、お空は旧地獄跡地へと、そして魅月はというと・・・

魅月「ねえ百合、いい加減離れてくれないかな？」

黒百合「なにを言ってるんですか？私はご主人様にお仕えしているだけですよ？」

魅月「いや、お仕えも何も、ただ抱きついているだけじゃ・・・」

なぜか黒百合に抱きつかれていた。
なぜこうなったかと言うと、

魅月が着替えて、仕事に行く
←

百合も行くと言い出す
←
わかった、じゃあいっしょに行こう
←
百合が腕に抱きつく
←
そして現在進行形になる

あれ、なんでこうなったんだろう？
魅月はなにかが違うと思いながらも、一向に離れない百合にもう一度説得を始めた。

魅月「じゃあ百合、僕はこっちを掃除するから、向こうをお願いできるかな？」

黒百合「そんな！？どうしてですか！？私が嫌いになったのですか！？」

魅月「その言い方はなんか誤解を招きそうだからやめてね」

黒百合「じゃあなぜ離れなければいけないのですか！？」

魅月「いやだって、地霊殿はさすがに広いし、手分けしてやった方が早いからね、お願いできるかな？」

黒百合「・・・・わかりました、私もメイドです、ご主人様の命令には絶対でございます、それで、どこを掃除すればいいのですか？」

魅月「それじゃあ、僕は東館の方を掃除するから、百合は西館の方をお願いね」

黒百合「わかりました、それでは掃除してまいります」

そういって百合は残念そうに西館に向かっていった、それを魅月は見届けて、掃除をするために東館にむかった。

それから30分近くが経ち、魅月は窓を拭いていた。
そして汚くなった雑巾をバケツにいれて洗い、再び窓を吹く。
この作業をずっと繰り返しているせいか、バケツの中の水はすでに真っ黒だった。

魅月「ふう、一回水を替えてくるかな」

そういってバケツを持ちあげた時に、ちかくの部屋で爆発が起きた。

魅月「な、なんだ！？確かあの辺りはさとりの部屋だったはず！」

魅月はバケツをいったん床に置いて、爆発音がした部屋へ急いで向かう。
そして部屋のドアが見える所まで来ると、爆発音がした部屋のドアを壊してお空が出てきた

お空「うわあぁぁぁん！！！さとり様のばかぁぁぁぁぁあ！！！」

さとり「こら、お空！！待ちなさい！！！」

お空が魅月のいる反対方向から飛び出していった、そのあとから服が所々破けたさとりが出てきた。
何事かと思い、魅月は聞いてみることにした。

魅月「さとり！！なにがあったの！？」

さとり「魅月、いたのですか！？」

魅月「さっき来たんだ、凄い音がしたからね。それで、一体何があったの！？」

さとり「実は、お空とちょっと喧嘩をしてしまいまして・・・」

魅月「（喧嘩で爆発って）そう・・怪我はない？」

さとり「はい、大丈夫です。それより魅月、お空を探してきてくれませんか？多分部屋にいると思いますが・・・」

魅月「わかった、探してくるよ！」

魅月は走りながらお空を探しに行った。

朝から喧嘩、そしてまた喧嘩（後書き）

誤字脱字とう在りましたら、感想などで教えてください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6781u/

東方地底郷

2012年1月1日00時58分発行